



205205-000-8

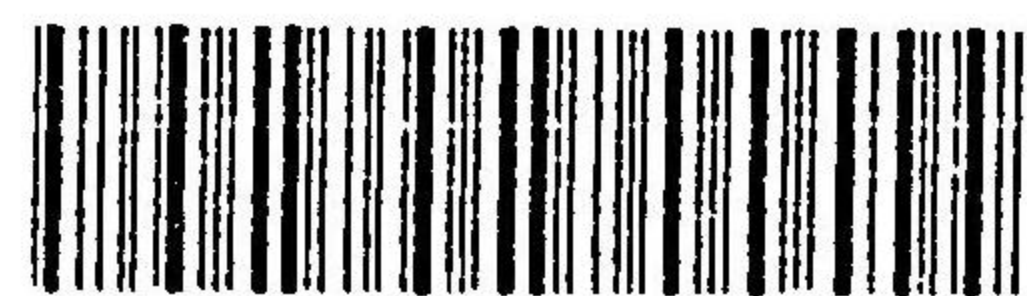
特71-455

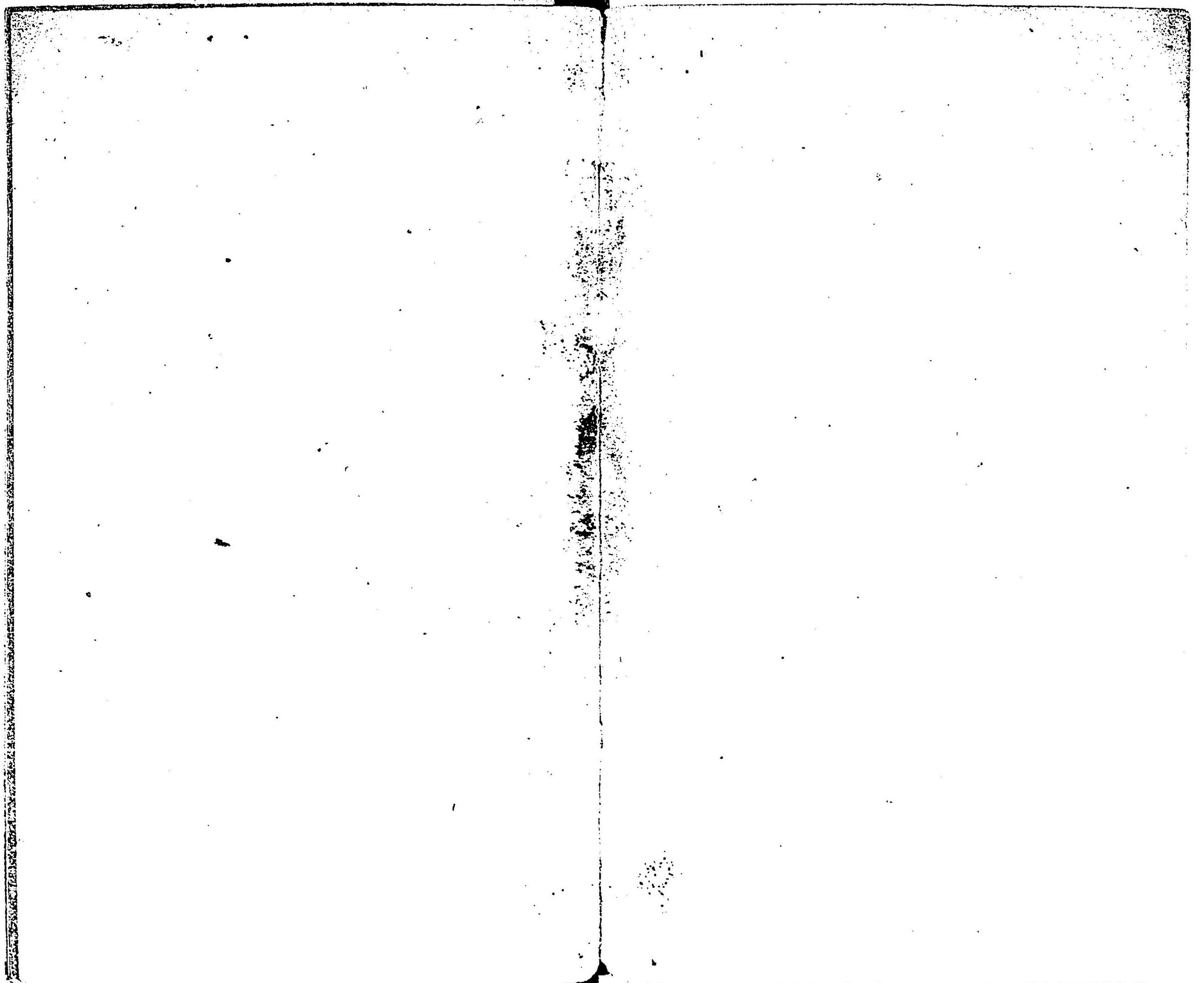
新選詩的俗謡

意想外史/編

M38

EDV-0232





特71
455

意想外史編

新詩的俗謔

東言
西文
社社

38 9 16

內交

序

人の感情より發りて、聲に調あり調に節ある之を詩若くは歌といふ。詩に種々の形式あり。古來我國に傳はり存するもの、みにも其類極めて多し。長歌の長さよりして、俳句、川柳の短きに至るまで、數へ來れば盡る其類に堪へざらん。今、井か中にて最も廣く民俗間に行はるゝものを求むれば、俚謠若くは俗謠の稱を以て呼ぶべき二十六字詩なり。是れ何れの時代に其詩形を成し得たるものなるか、今之を明かにする能

はずと雖、貞享、元祿の頃、廣く三都に流行せる投節に至りて、大に其面目を發揮せるものあるを認め得べし。其他普く全國各地に古くより行れ來りし白引歌、田植歌、盆踊歌の類も多くは此詩形に屬するを見る

投節の優麗典雅なる一唱して眞に三嘆を價するものあり。白引歌、田植歌、盆踊歌等の純樸素野なる情趣なか／＼に深くして酌めども盡さざるものあり。而して近く潮來節なるもの、起りて濃厚艶麗を極むるよりして風尙稍劣るに至りしが、之

詩俗的詩

詩俗的詩

に次て彼の都々一坊扇歌が盛んに唱へ出し、呼ぶに都々の名を以てするに及びて、淫靡卑猥聞くに堪へざるものとなり、遂には君士人の指彈する所となりて、専ら絃妓の間にのみ行はるゝに至りしは此の詩形の爲に轉た浩歎すべきなり。今にして之が弊を救ふにあらざれば其趣く所遂に那邊に到るやも未だ以て知る可らず、是れ吾人が茲に本書を編纂せんと欲する微意の存する所なりとす

夫れ俗謠は一種の平民詩にして、依て以て時代の風尙と民俗

序 文

の趣向とを知るに足る。詩としての價值、是其他のものに譲らんや。況んや俗語の特長は之に曲節づけて自由に語はれ得る至大の便宜を有するに於てをや。特に本書は、意を専ら其詩的價值と聲調美とに注ぎたれば、從來のものに比して大に其趣きを異にするものあり。些少なながらも俗語の本質を明かにして、平民文學に資するものあらば、編者の希望は之を以て足れりとせん

明治乙巳歲八月末の一日

編 者

凡 例

- 一、本書は之を編纂するに方りて、重きを其の詩的價值と聲調美とに致し、努めて淫靡卑猥聞くに堪へざるものを避けたり
- 一、本書は材を採るに、主として、投節、潮來節、磯節、白引歌、田植歌、盆踊歌等よりし、明治現代中のものを以ては僅かに之を補ひたるに過ぎず、故に作者氏名の明かなるもの極めて少ければ、其の体裁の一ならんを欲して悉く之を省きたり
- 一、本書は俳句の分類法に倣ひて、春夏秋冬及び無季の五部に大別し、更に之を類別小分したり。是れ從來此の類の書に多く其の例を見ざる所にして、編者

凡 例

詩 俗 的 諺

凡 例

が最初期せし程の成功をば遂に見る能はざりき

一、本書は俗諺普通の詩形即ち二十六字式のもの、之に五字を冠らしめたる三

十一字式のものより成り、字餘、詩人、文句入等は凡て之を省く。是れ此等の

ものには詩的價値を有するもの殆んど絶無なりしが爲なり

一、本書は端唄中の最も麗雅雅美なるものを抜き取りて隨所に之を挿入したり。

是れ新式のカットとして代用せるもの、讀者の目先を新にせんとてなり

一、本書は附するに俗諺研究の乘を以てし、之が起原、變遷、分類、作法、批評

等の概要を述べたり

新詩的俗諺

春の部 目次

詩 俗 的 諺

春の雪	一	玄鳥	九
春の雨	二	雉子	九
春の風	四	歸雁	〇
春の月	五	蛙	〇
霞	七	蝶	一
沙干狩	七	梅	三
茶摘	七	櫻	四
黃鳥	八	躑躅	八

目次

柳の花	一八
藤の花	二一
山吹	二二
茅花	二三
薔花	二三
草	二三
雜	二三
八	二八

詩 俗 的 謠

目 次	霰霜時冬	秋歸雁鹿粘露	秋の夜
	雨の月	の燕	
	冬	螢	
	の		
	部		

六五	六五	六四	六三	五三	五三	五二	五二	五一	四九	四八
----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----

鷺鷥	炬燵	年忘	雪	女郎花	萩	紅葉	蠶	松虫	虫	秋の蝶
----	----	----	---	-----	---	----	---	----	---	-----

六九	六九	六九	六六	五八	五七	五六	五五	五五	五四	五三
----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----

雜尾花	枯葉	落花	歸花	雜茅	淺	番	菊	薄	朝	顏
-----	----	----	----	----	---	---	---	---	---	---

七一	七一	七〇	七〇	六二	六一	六一	六一	六〇	五九	
----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	--

詩 俗 的 謠

目 次	五月雨	夏の雨	夏の月	清の水	田植	籬	風鈴
	夏	夏	夏	夏	夏	夏	夏
	部						

二五	二六	二六	二七	二七	二八	二八	二八
----	----	----	----	----	----	----	----

蚊遣	蚊帳	老鶯	時鳥	水鷄	螢	蚊	
----	----	----	----	----	---	---	--

四一 秋の風

四七 霧

四八

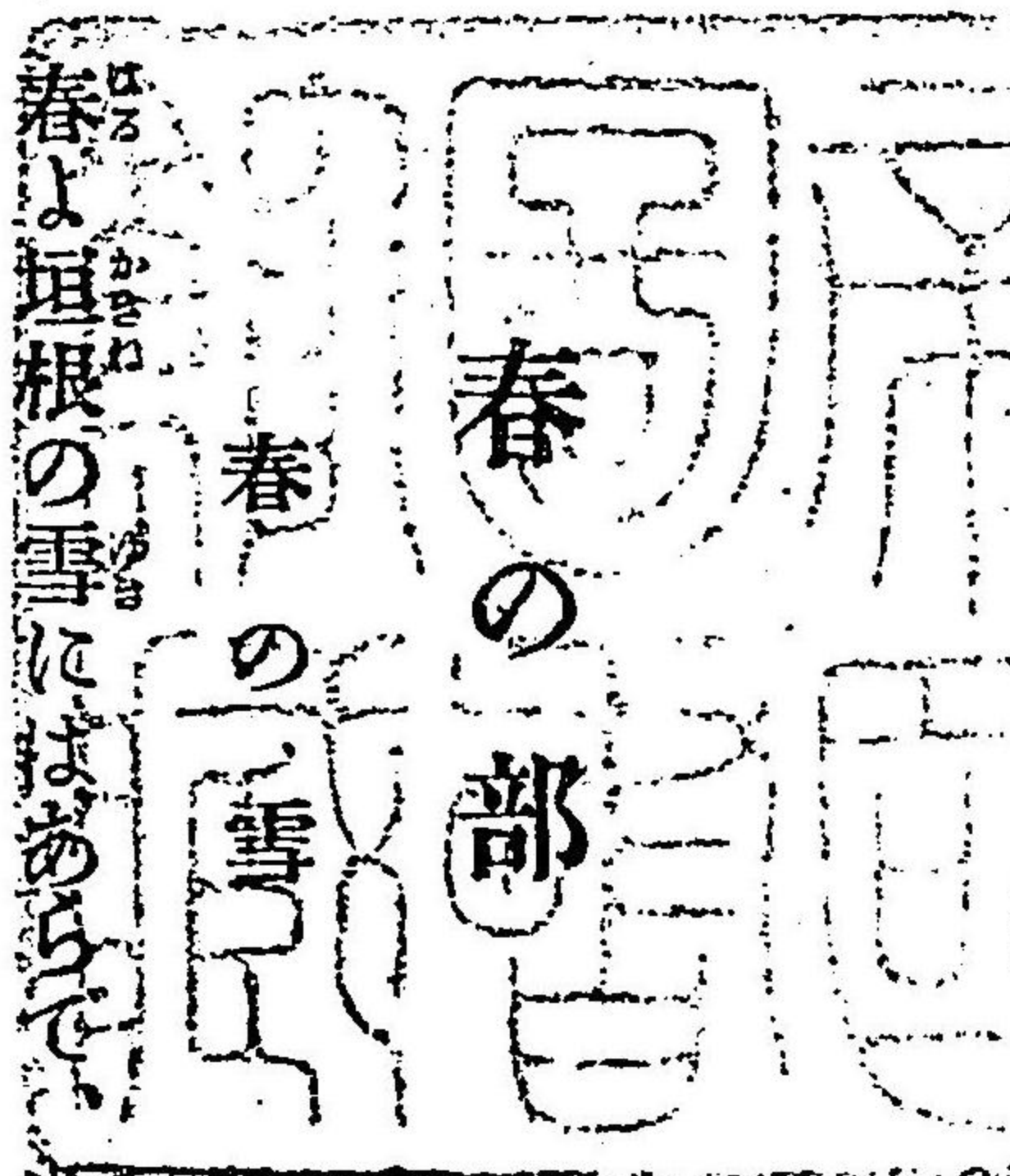
二九	二九	三〇	三〇	三四	三四	三七
----	----	----	----	----	----	----

卯花	茨花	撫子	杜若	百合	葛	雜蒲
----	----	----	----	----	---	----

三七	三七	三八	三八	三九	三九	四〇
----	----	----	----	----	----	----

詩 俗 的 謠

新 詩 的 俗 謠



春の淡雪はかない世にも、消えぬ譽の大和武士

春の部

意 想 外 史 編

詩 俗 的 謠

風 雲 水 月 夜 明 海 山 船 鐘 名 人
日 方 所 名

目 次
無 季 の 部

七三 七四 七四 七五 七五 七六 七七 七八 八一 八七

人 心 思 殿 戀 夢 火 淚 別 命 髮 寫
眞

八九 九〇 九一 九四 九五 九七 九八 九九 〇〇 〇一 〇二

渡 旅 移 文 絲 烏 松 竹 花 草 滑 雜
顏 香 種

〇二 〇二 〇三 〇三 〇四 〇五 〇七 〇八 〇八 〇一 〇一

春の雨

雨あめの降ふる夜よは一入床ひとしほゆかし、いつにおろかはなけれども
 よるべなき身みは夢ゆめこそたのため、うつな妻戸つまどを夜よるの雨あめ
 二人ふたりならんだあひく傘かさを、雨あめものぞくか横よこに降ふる
 心こころツクシに袴はかまをとらせ、濡ぬれるよめ菜なやはるの雨あめ
 雨あめは降ふるとも身みは濡ぬりやせまい、サマの情なさけを笠かさにさて
 春雨はるさめに、口説途切くせつとぎれて只ただくよくくと、泣ないて居ゐるのを賤しんた振よりに、寄よ
 る術すべも無なき女氣をんなぎを、擬しやくが取り持もつ仲直なかぢり

雨あめの降ふ出よりになが立初たちうて、雨あめはやめども名なはやまぬ
 待夜まちよさびしくアレ意地いぢわるな、心迷こころまよはずあめの音ね
 海老茶袴えびちまばかまと眼鏡めがねが土手どてを、言いはずかたらず春はるの雨あめ
 雨あめに舟ふねよぶ柳やなぎの渡わたし、濡ぬれてうれしいもやひがさ
 春雨はるさめに、しつぽり濡ぬるゝ鶯うぐひすの、羽風はかせに匂におふ梅うめが香かや、花はなに戯たは
 れしをらしや、小鳥こどりでさへも一筋ひとすぢに、城定じやうぢやうめん木きは一つ、わた
 しや鶯うぐひすぬしは梅うめ、やがて身みまゝ氣きまゝになるならば、鶯宿うぐいす梅うめで
 はないかいな、サツサ何なんでもよいわいな。

春の部

春の風

吹くか春風時節が来れば、去年の枝にも花が咲く
 花を咲かせてまた散らすとは、心ないぞへ春の風
 梅にからまる柳のいとを、解きに來たのか春の風
 解いて結んでやなぎの糸を、シラス心か春のかぜ
 花を散らしつ柳を解いつ、といつちらしつ春の風
 しばしもつる、柳の糸の、とけて怨みもはるの風
 袖の移り香まだしら梅を、來てはソヨ／＼春の風

春の月

清き流れに散り込む花の、なかをとりもつ春の風
 花がちらく二ひら三ひら、窓に散り來る春の風
 早蕨の、握拳に、罪とがもない、山の笑顔を春の風
 包む霞にひかりもうすく、何處か冴えない春の月
 花の曇りは雨にもならで、傘をはなさぬおぼる月
 楫を枕にうき寝の夢も、かすむおぼるのつきの影
 胸の鏡は今宵の月よ、うれしい逢ふ瀬も梅のかげ

春の部

春の部

朧月夜にアレにくらしい、ひとりくの二人づれ
 追うて恥かしアレ人ちがひ、朧月夜にくらしや
 問へど返事も朧なぬしは、何處へ意氣地を春の月
 用はなけれど何とはなしに、出て見たいぞや朧月
 てらずくもらず春の夜をさる、面しろいぞや朧月
 青柳の、糸の縋がサラリと解て嬉しさうだよ月の影
 月影に、うつる姿の、エ、憎くらしい朧かけ、髪かさ撫でて
 物思ひ、かうもやつる、ものかいな

霞

高い山には霞がかゝる、わしは其方に眼がかゝる
 沖をはるかに出てゆく船を、憎くや霞が隠すかや

沙 干 狩

足のあとまでならんで嬉し、主とつれ立つ沙干狩

茶 摘

アレに見ゆるは茶摘ぢやないか、茜標に菅のかさ
 笠は菅がさ標はあかね、ちやつみ女のしをらしや

春の部

春の部

黄鳥

春の黄鳥何をさして寝やる、はなを枕に葉をかけて

一夜明ればまた氣も變る、花の盛りは梅屋敷、初音一聲鶯

のほう法華けふの約束は、實にうれしいぢやないかいな

香に迷ふ、梅が軒端の匂鳥、花に逢瀬をまつとせの、あけて嬉

しき懸想文、開く初音も耻かしく、まだ解けかぬる薄氷、雪

に思へば深草の、百夜も通ふ戀の闇、君が情の假寝の床よ、

枕かたしく終夜

詩俗的

玄鳥

まねく柳のなさけの露に、濡れて飛び出す朝つばめ

まねく柳にうしろを見せて、くらいところへ来る燕

あひく傘した二人がなかを、ぬける燕が憎らしい

濡乙鳥門を幾度も通るは無事な、顔を見せにか見に来たか

雉子

雉子の雌鳥すゝきの下で、妻をたづねてほろゝうつ

雨よ降りやめお寺のわさの、柿の樹蔭に雉子が鳴く

春の部

春の部

歸雁

花をうしろに思ひをのこし、時にせかれて歸る雁
花や霞にひきとめさせて、かへしともない春の雁

蛙

これもさすがに哀れをそふる、小田の蛙の暮の聲
水に蛙のなく聲聞けば、ありしその夜が思はるゝ
池の蛙のひそくばなし、聞いてねる夜の春の雨
井戸の蛙と譏らばそしれ、花も散りこむ月もさす

蝶

蝶よ胡蝶よ菜葉に泊れ、泊リヤ名が立つ浮名立つ
花が蝶々か蝶々が花か、来てはちらく迷はせる
娘島田に蝶々がとまる、蝶々とまれや花ぢやもの
花にこがれる胡蝶の夢を、にくや風めが来て醒す
花の盛りを訪ひ来る胡蝶、嵐にもまれて遠ざかる
花にうかれて来る蝶々も、風が邪魔する世の習ひ
花の色香にうかく迷ひ、日暮わすれて居る胡蝶

春の部

春の部

花をあるじに木の下蔭で、結んで見たいよ蝶の夢
 思案つくく、眺める窓に、フイと舞ひ込む番ひ蝶
 花のにほひに迷ひし蝶も、濡れてうれしい春の雨
 樂しさうだよ彌生の野邊を、追つ追はれつ春の蝶
 花か蝶々かひらくくと、來ては迷はず窓の蝶
 菜種油の燈に來た胡蝶、死ぬる覺悟かしをらしい
 春風に、吹廻されし小蝶さへ、番ひはなれぬ女夫なか、菜の葉に
 契る心根を、風が邪魔して、袖や袂のあやとなる

梅

しめる障子に面影のこす、閨にうれしき月のうめ
 春の初めと泣かずに別れ、あとでほろりと梅の露
 袖に移りしこの梅が香は、東風の便りか今朝の春
 たまに逢ふのがたがひの花よ、梅も苔は香が薄い
 包む色香も何時しか洩れて、バツト浮名の匂ふ梅
 忍ぶ戀路は誰白梅の、色にや出さねど香に洩るゝ
 うつる薫に未練がのこり、立ちも兼ねたる床の梅

春の部

春の部

春の梅さへ開けばかをる、かくす懸路も人が知る
 年齢は十四で肩すれど、末にヤほころぶ梅の花
 私とも前は小鏡の小梅、なるもちつるも人しらぬ
 黄鳥を、とめてシツボリ樂しむ梅を、ソット見て居るヤホな月

櫻

面白いぞや今咲く花は、後の散りばは知らねども
 親は他國に、子は島原に、さくら花かや散りくくに
 月にむら雲そよ吹く風に、そでに櫻がちらくくと

春の部

咲いたさくらになぜ駒繫ぐ、駒が勇めば花が散る
 花が霞かかすみか花か、言ふに言はれぬ今朝の春
 咲いた花なら散ねばならぬ、恨むまいぞへ小夜嵐
 咲いた櫻に手は届ども、他所の花なりや見て戻る
 心ありげに散り込む花を、のせて棹さすいかだ舟
 夜櫻や、浮れ鳥がまいくと、花の木蔭に、誰やらがゐるわい
 なにとぼけさんすな芽ふき柳が、風にもまれてゐるわいな、ふ
 うわりと、おとさうかいな、さうぢいな

春の部

花は折りたし梢は高し、ながめ暮すか木のもとに
 花は一えだ折手は二人、わしはドチラへ靡こやら
 つゝむ霞の袖ほころびて、かをりこぼした峯の花
 風のさそふにほころび初めて、色香ゆかしき櫻花
 櫻咲くかや咲くかや櫻、なかにすみ田のみやこ鳥
 花のくもりか遠山の、雲か花かは白雪の、中をそよぐ吹く春風
 に、浮鏡さそふやさきなみの、こよは鷗も都鳥、扇拍子のさ
 んざめく、うちや床しき、うちぞゆかしき

春の部

闇の夜に來て櫻をけづり、赤いさゝるを墨で書く
 花の口もと耻かしさうに、笑ひをふくんだはつ櫻
 ちらす心かアレマアにくい、春の夜中の仇あらし
 春の浮氣についさそはれて、咲くや深山のおそ櫻
 おもふち方と見合ふた顔を、外けりや冷と花吹雪
 散ればこそいと櫻はめてたいものと、悟りながらもつらい雨
 春雨のはれて朧に月のさす、すぬな櫻の色よりも、微酔さ
 めの仲の町一ふさ欲しき花の露

春の部

躑躅

岩間いわまがくれの躑躅つとじでさへも、もゆる思おもひの色いろに咲こく

柳

何をなげくぞ川かはばた柳やなぎ、水みづの出でばなをなげくかや
色いろのよいのは出口でぐちの柳やなぎ、殿このにしなへてゆらくと
サマとワシとはうちごみ柳やなぎ、浮うけど洗しめど諸もろ共に
しだれ柳やなぎに櫻さくらを咲さかせ、梅うめのにほひをもたせたや
梅うめのにほひを櫻さくらにこめて、しだれ柳やなぎに咲さかせたい

春の部

たとへ錦にしきの風かぜふくとても、他所よそへ靡なくな糸いとやなぎ
緑みどりいろ増ます柳やなぎのもつれ、解こけてさらりと月つきのそば
來くるか來くるかと川かは裾すそ見みれば、河原柳かはらやなぎのおとばかり
何をくよく／＼川かはばたやなぎ、水みづの流ながれを見みて暮くす
橋はしのたもとのアノ糸いとやなぎ、緑みどりりしたゝるなよ姿すがた
どうなとしやんせと身みを投な出だして、風かぜに委まかる青柳あおやなぎ
ムツとして、歸かへれば門かどの青柳あおやなぎに、曇くもりし胸むねを春雨はるあめの、また晴はれて
行く月つきの影かげ、ならば廳おほほにしてほしや

春の部

東風の手管にツイ巻き込まれ、靡さかへりし糸柳
 主としつぼり今宵の雨に、濡れて色ます糸やなぎ
 君を見かへり柳のえだは、風にもつれて雨にとけ
 またも未練で見返り柳、こゝろ引かるゝうしろ髪
 引よせて、ちつと見つめる柳の芽から、ほろりと翻せし一車
 辻君の、絶えぬ流れの思川、戀にはほそる柳かげ、しばしと
 めたき三日の月、櫛のむねさへ小夜嵐、さらりと解けし洗髪、
 結んで清き水の音

藤の花

山で赤いのが躑躅に椿、咲いてからまる藤のはな
 馬鹿になさるな枯木ちやとても、藤に捲て花が咲
 すねた梢を手管とやらで、おつにからんだ藤の花

山吹

様と私とは山吹そたち、花は咲けども實はならぬ
 のどめする身に實のあらば、花にみのなる山吹に
 八重の山吹はてには咲けど、未は實のない事計り

春の部

春の部

山吹の、花のいる香に心をとり、駒の手綱がツイゆるむ
山吹の、色に迷うて浮名はたてど、當座の花には實がならぬ

茅花

野邊の茅花も時節が来れば、人の眼につく花が咲

薊

君は野に咲く薊の花よ、見ればやさしや寄ばさす

草

春の若草摘みさらされて、土にもひの根を残す

雑

露の思ひてやう／＼そだち、色に知られた春の草
春の草さへ秋には枯れる、嵯峨の庵のはてを見な
草は刈れども蝮蛇はかるな、蝮蛇狩すりや足噛る
土手の草、人に踏まれて一度は枯れて、露のなさけて甦る

雲に入る鳥かすみを幾重、隔てながらに聲もらす
花と月とにツイ誘はれて、今宵もうか／＼二人連
人がいひますコナタの事を、梅や櫻のとり／＼に

春の部

春の部

梅はにほひよさくらは花よ、人は心に夕ついたらぬ
 散るは櫻か將た蝶々か、鐘のひびきに、二つ三つ
 花に短冊つけるはよいが、餘所に主ある枝をるな
 思ひ切つてもまたふりかへる、岸に櫻の渡しぶね
 罪も柔の花ふんだり蹴たり、恨めしいぞへ春の駒
 いきな梅が香、あだめく櫻、赤きこゝろの桃のはな
 梅が主なら柳がわたし、仲のよいのかすれるのか、ある夜ひそ
 かに山の月、心、ないぞへ小夜嵐

夏 の 部

五 月 雨

さつき五月雨、涙の雨の、降るにつけてもなほ床し
 さつき雨ほど戀しのばれて、今はあさまの落し水
 降りみ降らずみ五月雨空を、軒に思案のわかき妻
 五月雨の、闇に迷ふも戀路のならひ、いつか晴間をまつ月
 五月雨の、或夜笥に小窓を明りや、そつと出て居る月の顔

夏 の 部

夏の部

夏の雨

来るかくと待せて置いて、外へそれたか夏の雨
庭にすゞしく湛へた水に、サツト降り来る夏の雨

夏の月

雲のすごみもいつしか消えて、心すゞしい夏の月
胸の曇りもいつしか晴れて、空に涼しい月を見る
粹な夜風に燈火を消させ、ソツト入込む蚊帳の月
月も意地わる蚊帳越しのぞく、耻かし妾の寝た姿

清水

みやま清水は底からすむが、君の心もそこからか
夏のたびして深山の清水、笹にむすべば玉ぞ散る

田植

揃たくよ田植新造が揃た、稲の出穂よりよく揃た
田植早乙女揃ひのでたち、聲もほがらに歌のふし
朝顔に、釣瓶とられて物思ひ、人の心と淀の水、はや明近き鳥
羽の船もやひ離れし燕かつら、聲もやさしき田植歌

夏の部

夏の部

簾

吹けよ松風、あがれよ簾、いまの小唄のゆし見たや、
吹けよ川風、氣もうちき舟の、すだれあぐれば筑波山
人目忍んだすだれの中を、野暮な風めがさし覗く
雲の上さへ吹く戀風で、うごきそめたる玉すだれ

風鈴

軒を吹く風、晝寝の夢が、覺めてすゞしき鈴のおと
風鈴の中に住居し私が心、どうかならうと風を待つ

蚊遣

伽羅をたかせた昔にかへて、今は嵯峨野の夕蚊遣
ひさごくづ屋にかやりをたきて、綾や錦と夕納涼

蚊帳

涼しあけぼの蓮吹く風が、紹蚊帳二人の夢さます
明けの高樓萌黄の蚊帳が、風に波たつゆらくと

起きて見つ、寢て見つ待てど便り無く、蚊張のひろさに只ひとり、
蚊をやく火より胸の火の、もゆる思ひを察しやんせ

夏の部

夏の部

老 鷺

老の黄鳥一こゑうれし、梅にむかしをしのび泣き
梅の小えだに昔をしのび、啼くやうぐひす老の聲

時 鳥

涙くらべん山ほととぎす、我も浮世のつらければ
空になく音はみならそ鳥よ、ねやのうちこそ時鳥
背の口説のしらけたあとを、ないてとほるや時鳥

其の曉の一聲は、花川戸より鳴きそめて、土手を八聲や時鳥

夏の部

來ぬ夜あまたの山ほととぎす、降るは村雨我が涙
月のあけぼの此の村雨に、いまはわすれぬ不如歸
蛙なくさへ恨みのあるに、まして寝ざめの勸農鳥
いととさびしき寝ざめのとこに、涙な添へそ時鳥
血を吐く想ひの今宵のわかれ、月も泣いたよ子規
一聲は、月がないたか子規いつしか白む短夜に、未だ寝も足らぬ
手枕や、男心は凄らしや、女心は然うぢやない、片時遊
はねばくよくくと、愚痴なこゝろで泣いて居るわいな

夏の部

わきてつらさは山杜鵑、聲もかたちもいづこぞや
 見たや逢ひたや山時鳥、すがたならねば聲なりと
 月を待つ間の空晴れやらで、わつとなき出す蜀魂
 今か今かと寝られぬ耳に、待たぬ一聲ほととぎす
戀し戀しがつい、腋となる、胸にさしこむ窓の月、今や來るか
 待つ身も知らず、待たぬ一聲ほととぎす
 垣根卯の花時鳥、一聲ないて聞かまはし、音信ないがこぶじ
 か、どうじゃいな、アノナどうじゃいな

夏の部

ひとり山道もの凄まじさ、早く聲出せほととぎす
 待つにかひなきアノ郭公、雲井へだたる聲ばかり
 たまに逢ふ夜にアノマア憎い、一聲血を吐く杜鵑
 月は更けゆく鐘の音ひくう、またも啼くかや時鳥
 五月雨に、袖も乾かぬくぜつの中へ空へ音をなくほととぎす
 小夜更けて、月を待間のアノ子規、逢ひたいみたいと焦なく
鶯の聲、鐘の音さへ身にしみて、いとさびしき闇の内、待身は
 つらまひぢまくら、思はさぶりな時鳥

夏の部

水 鶏

たゞく水鶏にまたどまされて、起きて耻かし我姿
たゞく水鶏か松吹く風か、更て妻戸をおとづる、
待つ夜の柴の戸叩くは誰ぞ、主か水鶏か風の音か
ならば此身が水鶏となりて、思ふ妻戸を叩きたい

螢

思ひ亂れて蘆屋のさとに、海士の焚く火か飛ぶ螢
燃ゆる想を消さんとするか、野邊の螢の露に寝る

夏の部

さてもやさしき螢のむしや、しのぶ暇の暗てらす
可愛らしいよほたるの虫は、忍ぶ暇に火をとぼす
戀し戀しと鳴く蟬よりも、鳴かぬ螢は身をこがす
思ひ焦れて野に飛ぶほたる、夕べく身に身を焦す
月にかくれて暗には晴れて、逢にや螢のもゆる胸
すゞむ門邊をゆきかふ螢、月に耻ぢてか見え隠れ
しげる戀草腐つて化ける、螢も其の身を焦すもの
後を慕うて追ひ行くものを、知らぬ顔して飛ぶ螢

夏の部

露のなさに夜は引かされて、ひとり細道行く螢
 態と闇夜を逃げのびながら、行先あかして飛ぶ螢
 闇に忍べばわからぬものを、照して人目につく螢
 聲はとどけどアレ憎らしい、川をへだて、飛ぶ螢
 雲に匿れし月をば見上げ、ソツと出た行くはの螢
 雲に入る、月の油断をゴツツと忍び、軒端つたうて来る螢
 ものいはで、鳴かぬ螢を笑ふでか、真に心も闇の夜の、草に
 宿かる螢の身を、散らす嵐の想しらすの

蚊

逃した蚊がアレ憎らしい、打つに打たれぬアノ寝顔

卯花

玉川に、咲ける卯花岸白々と、雪か月夜かむく霜か

茨花

刺の中にも花咲茨よ、知らず手を出しや怪我をする
 美しく咲くアノ茨さへも、花にかくれた刺をもつ
 山を通れば茨がとめる、茨はなしやれ日が暮れる

夏の部

夏の部

撫子

送る格子に咲く撫子の、花になみだのつゆが散る
露のなさを葉毎にとめて、朝の撫子しをらしや

杜若

清き流れの淺瀬に花の、いろ香貴としかきつばた
水あげかねたる思ひの丈を、文にこましく燕子花
淺くとも、清き流れの燕子花、飛んで往來の編笠を、覗いて来た
か濡れ乙鳥、顔が見度いぢやないかいな

百 合

様の寝姿今朝こそ見たれ、五月野に咲く百合の花
夏の山道谷間を見やれ、谷間谷間に百合が咲く

菖 蒲

我は菖蒲の音にこそ泣かめ、引くな袂の露けき
潮來出島の眞菰の中で、菖蒲咲くとはしほらしや
よそに思ひし昨日の菖蒲、今日は我家の妻となる
君にうつかりアノ花菖蒲、にくや邪魔する五月雨

夏 の 部

夏の部

雑

尻しりに敷しかれる庭にわらも時節じせつ、菫すみさへ花はなさくなつがある
 庭園てい園にやり水燈籠みづとうろうの火影はかげ、夏なつの小座敷こざしきつりしのぶ
 きぬくの、別れわかに空そらも雨あめこそふ、蟬せみと螢はたるを科はかりにかけて、泣な
 いて別わかりよか焦こがれてのきよか、ア、昔むかし思おもへば見みず知しらず

色氣いろけないとして苦くにせまいもの、賤しんが伏屋ふせやに月つきがさす、見みやれ茨はつに
 も花はなが咲さく、田植たうえ辰とどろに袖そで裾すそ引ひれ、今宵こよひ逢あうと眼めづ使かひ、招まねく合あ
 圖づの小室こむろ飾かし、薄うすに残のこる露つゆの玉たま、かしくと讀よんだが無む理りかいな

秋の部

月

よしや今宵こよひは曇くもらばくもれ、とても涙なみだで見みる月つきを
 住すめば浮世うきよに思おもひ増ますに、月つきと入いらばや山やまの端はに
 月つきは人目ひとめの關路せきろもなしや、西にしにながる、夜半よはの空そら
 よそになしてもとへかし人ひとの、月つきは誰故たれゆゑ袖そでに住すむ
 泣ないて寢顔ねがほのなかばは雲くもに、見みえてこぼる、袖そでの月つき

秋の部

秋の部

恨みながらも又うち向ふ、月はゆかりか憂き人の
 月を見ればやと契りし人も、今宵袖をやしぼるらん
 せめて宿れよ小簾もる月も、日頃もとめし憂き涙
 松の葉ごしの磯邊の月は、千歳經るとも變るまい
 せめて聞もる月影なりと、しばし枕にとまれかし
 逢はでかへれば心の闇よ、月は冴ゆれど道見えす
 残るかたみの鏡にうつる、つきのさをひし面影は
 くるわはなれて罪なき月を、いつか都の空に見ん

秋の部

うきみ浮草しづみもはてぬ、そこの心を月やしる
 月はひさしや聞までさすに、わしが心はしんの闇
 月はさゆれど心はくもる、わしが戀路は闇ぢややら
 風が戸叶きやうつゝで明けて、月に耻かし我が姿
 月はいみじき闇こそよけれ、しのぶ姿の顔見えす
 月夜うたてや闇ならよかる、待ぬ間に來て門に立
 月は東にすわるは西に、いとしトノゴはまん中に
 明日も來て見な萩おしわけて、野路の玉川波の月

秋の部

月つきは傾かたむく夜よはしらぐと、話はなし途とぎ切きれて眼めに涙なみだ
 窓まどの障しやうじ子こに墨すみ繪ゑの竹たけを、かいたり消けしたり風かぜの月つき
 残のこり惜をしさに後あと見み送おくりて、月つきを合あ手てにひとりごと
 憂うれき身みうき草くさ沈しづみも果はてぬ、そこの心こころを月つきや知しる
 此こなた方なた思おもへば黯くろる日ひが曇くもる、冴さえた月つき夜よが闇やみとなる
 憂うれしや心こころを誰たれしら露つゆの、袖そでにやどるは月つきばかり
夕暮ゆふぐれに、詠なめ見み飽あかぬ隅すみ田た川がは、月つきに風かぜ情せうを待まち乳ちやま山やま、帆はか掛かけた船ふねが
 見みゆるぞへ、アレ鳥とりが啼なく鳥とりの名なの、都みやこに名な所しよが有あるわいな

秋の部

身みに引ひきくらべて夫つま戀こふ鹿しかの、聲こゑも淋さびしき寢い覺ぐ月つき
 見みゆる此この身みの影かげのみ寫うつす、月つきより外ほかには訪たづねはぬ軒のき
 夜よ毎ごと々のさびしき闇やみを、訪たづねは雲くも井いの月つきばかり
 宿やどる月つきさへあはれを添そふる、そでと袖そでとの憂うれき涙なみだ
 或ある夜よひそかに人ひと目めをつゝみ、主ぬしを松まつからしのふ月つき
 すめば宿やどるし濁にごれば消きゆる、ホんに浮う氣きな水みづの月つき
 うつるものならうつして見みたや、月つきの鏡かざに主ぬしの影かげ
 アレサ御ご覽らんよだん／＼あがる、月つきは御ご行ぎやうの松まつの上うへ

秋の部

顔^{かほ}をチラリと三笠^{みかさ}の山^{やま}に、出^いでてまばゆき月^{つき}の眉^{まゆ}
 柳^{やなぎ}隠^{かく}れのアノ三日月^{みかづき}は、凄^{さび}いはづだよやみあがり
 未^み練^{れん}有^{あり}明^{あき}見^みおくる空^{そら}に、やつれすがたでのこる月^{つき}
 夢^{ゆめ}のかけ橋^{はし}幾^{いく}瀬^せも越^こえて、後^{のち}の月^{つき}夜^よに目^めをさます
 こんな形^な状^{じやう}してはづかしらしい、罍^{たい}一^{いつ}ばい松^{まつ}の月^{つき}
 想^{おも}ひ出^たします去年^{きよねん}の今宵^{こよひ}、月^{つき}がよう似^にたアノ月^{つき}に
 枯^{かれ}野^のゆかしき隅^{すみ}田^た堤^{づみ}こゝろも冴^さゆる夜^よ半^{はん}の月^{つき}、田^た面^{めん}にうつる人^{ひと}
 影^{かげ}に、バツと立^たつたはア雁^{かり}がれの女^め夫^{をと}づれ

秋の風

秋^{あき}の夜^よ風^{かぜ}の身^みにしみくと、猪^ち牙^{よき}ぢや寒^{さむ}かる隅^{すみ}田^た川^{がは}
 しのぶ夜^よ道^{みち}に氣^きをくばれとて、後^{のち}から吹^ふく秋^{あき}のかぜ
 桐^{きり}の一^{ひと}葉^はのおとづれ絶^たえて、ぬしは小^こ窓^{まど}にあき^{あき}の風^{かぜ}
 逢^あぬ今宵^{こよひ}はなくきりくす、いと身^みにしむ秋^{あき}の風^{かぜ}
 残^{のこ}るあつさの間^まの戸^と洩^もれて、そつと入^いり來^くる秋^{あき}の風^{かぜ}
 風^{かぜ}が物^{もの}いや言^いつてしヨもの、風^{かぜ}は諸^{しよ}國^{こく}を吹^ふきまほる
 更^まけてぼんやり主^{ぬし}待^{まち}つ間^まに、吹^ふくや秋^{あき}風^{かぜ}身^みにぞしむ

秋の部

秋の部

霧

なさないぞや今朝たつ霧は、歸る姿を見せもせぬ

秋の夜

秋は夜長し訪ふ人もなし、明かしかねたる今宵かな
峯のまつ風つま戀ふ鹿の、訪ふやあきの夜庵すまむ
秋の夜は、ながいものとは眞んまるな、月見る人のこころかも、
更けて待てども來ぬ人の、音信るものは鐘ばかり、數ふる指も寝
つ起きつ、わしや照されて居るわいな

露

こころくの世の中なれや、花のうてなの露の色
露の玉の緒限りはありと、うつる面影かはるなよ
通ひなれにし朱雀の野邊の、露はものは我が涙
歸る野道の淺茅にやどる、露にそへたる我なみだ
ひとつ枕に沈みしなかも、憂きは別れの袖のつゆ
扇ならでも身はふるさる、秋の眺めよ露ばかり
わかれ行く秋流石にかなし、袖にかたみの露の玉

秋の部

秋の部

歸し兼ねては提へし袖に、つらやこぼるゝ朝の露
 夢の昨夕のなみだが今朝は、草の葉に見る露の玉
 露になりたや袂の露に、消えぬうき身のかち草
 置いた夜露についほだされて、風にまかせた糸薄
 露の光を便りにしのぶ、背戸の草にも置くこゝろ
 君と別れて秋の野行けば、月も泣いてか草のつゆ
 細い道さへ手に手を引いて、濡れる覺悟の萩の露
 白露や、無分別でも草葉がたより、戀の深みの置きどころ

砧

更けて砧の音より聞けば、月に落ちくる我なみだ
 雲の絶間をもし出る月に、冴えてきこゆるとほ砧
 忍びあふ夜は砧の音も、いつかみだれて月のそら
 うつゝ心にそれかと思ひ、ソツと立ち出りや遠砧
 君来ずば、國へは入らじ柴の戸へ、出でては販り販りては、椽の橋
 場の遠砧、もて来る風の音信に、のぞいて見れば我れより外に
 影ぞなき

秋の部

秋の部

鹿

月も入るさの山の端隠れ、身につまさるゝ鹿の聲
 紅葉ふみわけ妻こふ鹿の、聲もさびしき秋のくれ
 戀のやみ路はてらさぬ月に、ないて妻こふ峰の鹿
 朝な夕なにおとづるものは、峯のまつ風しかの聲
 儘に逢れる身であるならば、汝もなくまじ峯の鹿

雁

雁が三つ四つみだれて飛ぶは、誰が急ぎの使ぞや

歸 燕

文のたよりを待つ雁よりも、歸る燕がいぢらしい

秋の草

秋のほたるの露よりよわき、光りあはれや畔の草

秋の蝶

來てはチラ／＼思はせぶりな今日も止らぬ秋の蝶
 花と寝た身を今では夢と、ひとりはかなむ秋の蝶
 花に結びしむかしの夢も、いまはいづこぞ秋の蝶

秋の部

秋の部

虫

人目しのぶの草葉に結ぶ、露の玉虫ねにぞなく
 聲も枯野にないてる虫の、露のなさけに明す夜半
 闇の千草に宿かる虫も、月にこがれてなきあかす
 手摺に凭れて假粧の水を、何處に捨てよか虫の聲
 庭の草葉に虫の音ふけて、軒の燈籠もねむい顔
 忍び足して聞の戸あけて、ソツと立ち聞く虫の聲
 庭にや虫の音外には小砂利、鳴と止とが忍ぶ邪魔

松 虫

秋の夜に、風が持て来るあの虫の聲、焦るゝ我身に染々と

秋の夜風の身にしみくと、誰を松虫音をほそく
 宿のさびしさ主松虫の、鳴くもこゝろの八重葎
 耳をすまして聞いたも幾夜、ぬしを松虫窓のささ
 庭の松虫音をとめてさへ、若や来たかと胸さわぎ

蝻 斯

聲はすれども姿は見えず、君は深山のきりくす

秋の部

秋の部

蝨斯鳴くや霜夜の淋しき土手を、ようまアコ、まできやしやんす
きりぐす、胡瓜切られてきて籠の中、親は草葉の蔭でなく

紅葉

紅葉焦るゝ色とは聞けど、末の落葉を誰れか知る
秋が来たやら鹿さへ鳴くに、なぜに紅葉が色附ぬ
浮名立田の山みち行けば、顔に紅葉が散りかゝる
あれ見やしやんせ海晏寺、眞間や立田の高尾ても、及びないぞへ

紅葉狩

萩

みだれ初めにし心がにくひ、仇な夜露にぬれた萩
かへる主をば見送る背戸の、門に小萩の亂れ咲き
忍ぶ夜嵐かくして居ても、眼につく島田の亂れ萩
猪に抱れて寝る萩よりも、勤めする身は尙つらひ
秋のほそみちみだれし萩の、露をこぼすや朝の旅
月の夜に来て鹿さへなくに、人は訪はぬか庵の萩
猪を、抱いて寝るのも時世と時節、泣いてしなるゝ萩の花

秋の部

秋の部

女 郎 花

風かぜのまに／＼なびいた葉はにも、涙なみだの露つゆ持もつ女郎花をんなはな
 露つゆの果敢はかなき情なさけに濡ぬれて、風かぜにやもまるゝ女郎花をんなはな
 名なさへ知しれない千草ちぐさの中なかに、獨ひそり目めに立たつ女郎花をんなはな
 仇あだに吹ふきよるいたづら風かぜに、うかと靡なびかぬ女郎花をんなはな
 頼たのむあさ目の影かげさへ消きえて、露つゆにしをるゝ女郎花をんなはな
 捨すてた浮世うきよの庭にわへ、誰たれが植うゑたかをみなへし
 いきな刈かかや、あだめく桔梗ききやうそして風情ふうせいな女郎花をんなはな

朝 顔

美うつくしく、咲さいたアノ花はなよくおみなへし、秋あきが来きたとて散ちりかふる

瑠璃るりや淺黄あさぎに咲さく朝顔あさがおも、色いろはかはれど根ねは一つ
 垣かきのあさがほ毎まいあさ咲さいて、末すゑの一輪いちりんちさく咲さく
 朝顔あさがおの、からみつく竹引たけひきはなされて、花はながうつむきや露つゆが散ちる
 牽牛花あさがおに照てらす日影ひかげのつれないととも、明日あすも盛さかりあるわいな
 朝あさ咲さいて、よつに萎しれる牽牛花あさがおさへも、露つゆに一夜いちやの宿やどを貸かす
 朝あさ咲さいて、よつにしをるゝ身みを持もちながら垣かきにもたれて思案顔しあんがほ

秋の部

薄(尾花)

不二の裾野の一もとせ、いつか穂に出て亂れあふ
 露の情にツイほだされて、思ひ十寸穂の篠すしき
 亂れ初めにし心のもと、風となじみし花すしき
 あふささるさに亂れて今朝も、尾花隠れに立留る
 招く尾花にフトだまされて、露のなさけのくさ枕
 露は尾花と寝たといふ、尾花は露と寝ぬといふ、ア、寝たといふ
 寝ぬといふ、尾花が穂に出てあらはれた

諸俗的詩

菊

梅や櫻は七重も八重も、なぜに野菊は一重咲く
 梅も櫻も牡丹もいやよ、わしは返事をさくが好い
 露のなさけの色香にそみて、いつか逢瀬を菊の花

番椒

美しい顔して居る癖に、にくい味もつ唐がらし
 見かけばかりにツイ惚込んで、辛いめを見る番椒
 いつの夕に袖振り別れ、もはやあさじも背に餘る

秋の部

秋の部

薄(尾花)

不二の裾野の一もし世、いつか穂に出て亂れあふ
 露の情にツイほだされて、思ひ十寸穂の篠すすき
 亂れ初めにし心のもとは、風となじみし花すすき
 あふささるさに亂れて今朝も、尾花隠れに立留る
 招く尾花にフトだまされて、露のなさけのくさ枕
 露は尾花と寝たといふ、尾花は露と寝ぬといふ、アレ寝たといふ
 寝ぬといふ、尾花が穂に出てあらはれた

菊

梅や櫻は七重も八重も、なぜに野菊は一重咲く
 梅も櫻も牡丹もいやよ、わしは返事をさくが好い
 露のなさけの色香にそみて、いつか逢瀬を菊の花
 番椒
 美しくしい顔して居る癖に、にくい味もつ唐がらし
 見かけばかりにツイ惚込んで、辛いめを見る番椒
 いつの夕に袖振り別れ、もはやあさじも背に餘る

秋の部

秋の部

雜

水の流ながれも昨日きのふにかはり、さびし小川せがはの暮くれのあさ
 植うゑて三尺穂さんじやくほに出て五尺ごしやく、さても見事みごとな此早稻このわせは
 今年ことし豊年穂ほうねほに穂ほが咲さいた、道みちの小草こくさにはなが咲さく
 更よけて月漏つきもる埴生はなぶの小屋こやも、聞きくや松風まつかぜなみの音ね
 其それでなくとも袂たもとをしぼる、降ふるな今宵こよひは秋あきの雨あめ
 ぬれぬ先さきから浮名うきなたつ、すゝきは露つゆを戀こひ慕したふ二人ふたりが仲なかをいぢわ
 るな、風かぜが邪じやま覺あしてちちくくと、おちて耻はづかし月つきの影かげ

冬 的 部

冬 的 月

冬 的 部

人ひとの苦勞くらうも空吹そらふくかぜと、すましきつてる冬ふゆの月つき
 雨戸あまどほとく主ぬしかと明ありや、耻はづかし晚はらんだ冬ふゆの月つき
 雪ゆきにとどざれ道みちなき庵いほり、せめて訪とへかし冬ふゆのつぎ
 船ふねの橋柱はししらさびしう照てらす、すごいひかりの冬ふゆの月つき
 千里胡沙せんりこさ吹かく風かぜさへ絶たえて、さびし馬子まこ唄うた冬ふゆの月つき

冬の部

時 雨

思ひつゞけて涙のしぐれ、定めなきこそ浮世なれ
 松の時雨に夢うちさめて、よその哀れが思はるゝ
 さんざ時雨か萱野の雨か、音もせて来て濡れ懸る
 止んで居る間に歸るとすれば、又も降出す村時雨
 時雨降る、あさちが原の夕ぐれに、二聲三聲雁がれの、便り待
 つ身の憂や辛や、戀の浮橋中絶えて、道瀬なみだやもつれ髪、いふ
 にいはいぬ胸の中、思ひやつたがよいわいな

霜

今朝はことさら寒いにつけて、思ひ遣ぞへ堤の霜
 風に亂れし木の葉の上に、白う置いたる今朝の霜
 馬もいなく節面しろう、馬子がわたるよ橋の霜

霰

霰降るらし外山のかづら、色に見ゆるを如何せん
 ぬしを松風ねやの戸もれて、またも霰のたゞく音
 雨戸たゞけど明けない故か、飛んで這入つた玉霰

冬の部

冬の部

雪

雪の外山のあけぼのつらや、かやが軒ばの鳥の聲
 雨は降りく雪降るあひだ、しのぶ細路竹たはむ
 ちらりくと降る雪さへも積りくして深くなる
 宵にチラリと見初めた雪が、今朝は積つて銀世界
 駒とめて、袖うち拂ふ影もなき、佐野の渡りの雪ならで、アレ儘
 子にも六の花、譬にも言ふ銀世界、是非飯るとは人ぢらし、羽
 織隠すも初手のうち、縁や餘程積つたか

冬の部

雪にや留たし飯さにヤ悪し、心二の字の下駄の痕
 これのお背戸のチラく雪に、誰が付たか下駄の痕
 合はぬ齒の根を下駄さへ残す、忍ぶ軒端の雪の上
 回る地球にいかりを下し、暫しとめたき今朝の雪
 雪のはだへに氷のやいば、露のいのちの捨てころ
 我物と思へば輕し傘の雪、戀の重荷を肩に掛け、妹許行けば冬
 の夜の、川風寒く千鳥啼く、待つ身につらき沖の石、實に遣る瀬
 がないわいな

冬の部

凝り堅まつては岩より堅い、雪も解ければ唯の水
 辛い勤も苦にやせまいもの、雪の下にも花が咲く
 雪はちら／＼待夜は長し、エ、モじれたい茶腕酒
 雪に添ひ寝のかず／＼積り、重い身となる窓の竹
 風吹いて、道も絶えなん雪の夜半、來ぬがましごと諦めて、酒
 の合手に轉腰の、積る怨の宵のうち、思道つたが宜いわいな
 羽織かくして袖ひき止て、何でも今日は行かんすかと言つゝ立て
 櫃子窓障子細めに引あけて、アレ見やしやんせ此雪に

年 忘

愚痴の埃もうは氣の塵も、はらひて互ひに年忘れ
 思ひ出す種またこしらへて、今宵二人が年わすれ

炬 燵

あつい情を蒲團でかくし、人目にこゝろを置炬燵
 思ひ切つては放れて見ても、又も未練で寄る炬燵

鴛 鴦

四方に雲なく朝日は昇る、何をなくやら鴛鴦二つ

冬の部

冬の部

歸 花

つゞく日和ひよりについ騙たまされて、うかく咲さいたか歸花かへりばな
小春日こはるびより和よりについさそはれて、咲さくやさびしき歸花かへりばな

落 葉

花はなの姿すがたも落葉おちばとなりて、見みかへりてのない冬木立ふゆこたて
主ぬしが通かよふた此この足形あしがたを、落葉おちばがかくす氣きがにくひ
冬ふゆを來きて見みなふもとの庵いほり、落葉おちばひらく風かぜに舞まふ
山家やまがわびしや來くる人ひとなくて、おち葉風はあらしにさわぐ音おと

枯 尾 花

露つゆにヤ捨すてられ雨あめには打うたれ、やつれ果はてたる枯尾花かれおぼな
露つゆをやどせしむかしは夢ゆめよ、今いまはやつれし枯尾花かれおぼな

雜

消きえぬ心こころのなかばは雲くもに、かよふ嵐あらしをよすがにて
峯みねの嵐あらしか戀こひしき人ひとか、更ふけてあま戸とにおとづるゝ
如何いかに思おもひを篋かひの水みづも、氷こほりりてかよへぬ時ときがある
灰はいに書かいては又またかき消けして、火箸ひはしも寝ねさゝぬ終夜ともすけら

冬の部

冬の部

舟ぢや寒かるこれ着ておいて、妾が部屋着の此どてら
 雪をかぶつて寝て居る竹を、来ては雀かゆり起す
 冬どさびしき山里なれど、うれし今年は主のそば
 念がとどいて斯くなるからは、春の氷のうすきはいやと、れみだ
 れ髪もはづかしく、解けた素顔の夏のふじ、秋の扇と聞くもうし、
 こちやしつぼりと夜の雪、積りくって深くなり、人目しのびし冬
 こもり

無季の部

風

寒や北風冷たやあらし、わしを思はゞ南風が吹け
 寒やさたかぜ可愛や小供、さいの河原で石を積む
 主の心と空吹く風は、どこのいづこでとまるやら
 風よ吹けく木葉を乗て、乗た木葉の落ちぬほど
 背戸の山から吹き来る風の、末は何處の果を吹く

無季の部

無季の部

雲

程は雲井にへだつるとても、心變らないつまでも
我れが思ひはあの浮雲よ、いづこ行方を定めなき
廻り逢、見しや夫共分らぬ内に、主は外して雲隠れ

水

涙こぼして氣を取り直し、瘦はせぬかと水かゞみ
墨と硯は仲よいけれど、水をさゝれりや薄くなる
雨散雪や氷と隔てゝあれど、落つれば同じ谷の水

月 日

過る月日は我のみ知りて、かひもなき身を打歎く
歎きなる世も月日を送る、さても命はあるものか
かよふ心は雲井のよその、中とすぎゆく月日かな

夜

闇夜なれども忍ばし忍べ、伽羅の香をしるべにて
君に逢ふ夜は植生の小屋も、玉の臺にまさるもの
何か斯うかの待夜の所作に、来るか來ぬかの盤算

無季の部

無季の部

幾夜ねぞめの涙の淵瀬、なみのうねく浮まくら
幾夜ふるとも漏さぬ水の、下に通ふやはねぶみ
いかに隔てし覺束なさぞ、しめて寢夜もあかぬ身の
辛いものだよ馬喰衆の夜路、夜るは轡の音ばかり

明 方

最早明方眼を覺さんせ、日々に逢れる身ではなし

海

千代に入千代に御代治まりて、浪も静かに四の海

山

山が高うて彼の家が見えぬ、彼の家可愛や山にくや
餘りつらさに出て山見れば、雲のかしらぬ山もなし
みやこくとわしつれて来て、こゝがみやこか山中を
高い山から谷ぞこ見れば、瓜のはなやらなすびやら
高い山から海の底見れば、鯛やたなごや海老くづや
山家なれどもわが故郷は、柴のいほりもなつかしや
山家々とあしげにいやる、いろのよい花山に咲く

無季の部

無季の部

船

あまの捨舟すてぶねよるべも知らで、ひとり涙なみだにふししづむ
 色いろに沈しづみて消きえゆくならば、ひきはかへさじ捨小舟すてせうぶね
 舟ふねがつくく百二十七艘ひゃくにじふしちそう、さまがござるがアノ中なかに
 走はしる舟ふねでもまねけばいそへ、よるは心こころのまことから
 舟ふねはドンドと帆はかけて走はしる、茶屋ちやの娘むすめが出てまねく
 舟ふねは帆はをまく、帆はは真中まんなかに、かあい殿御とのごは帆はのかけに
 人ひとのむすめと新造しんざうの船ふねは、人ひとが見たがる乗のりたがる

鐘

鳥とりもはらく夜よもほのくくと、鐘かねも鳴なります寺てら々に
 鐘かねがなるかよ撞木しゅもくがなるか、鐘かねと撞木しゅもくのあひがなる
 月つきはかたぶく夜よはしんくと、心こころほそさよ後夜ごやの鐘かね
 霧きりが霽はれたか白帆しろはが見みえる、明あけのてらく鐘かねの聲こゑ
 今鳴いまなるは、たしか上野うへのか淺草あさくさか阿呆あほうが笑わらふとまよふ、かあいか
 あいと引ひきしめて、居ゐつゞけさそふ雨あめの朝あさ、隅田すみだの川風かぜ浮氣うきはきをつ
 れて、宵よひの口説くちやくのさめこころ、仲直なかなはりすりや明あけの鐘かね

無季の部

無季の部

泣いて待夜の更けゆく鐘は、明の鐘よりなほつらい
 捨てた此子をまたふところに、抱けと響いた霜のかね
 三更四更の夜もふけわたり、もはや五更か明けの鐘
 更けて聞く夜の鐘の音ひくう、心ぼとさよ旅のそら
 逢ふた夜の、宵は騒ぎてまぎれて居たが、更けてくる程しんしん
 と、もはや時刻を待つうちに、ゴンとついたる鐘の音に、もしへお
 かごが参りました、エ、モウしんきな駕籠やさん、たまく逢ふ
 のに知りもせて

名 所

富士の裾野の一本薄、いつか穂に出てみだれあふ
 雲の帯して空色小袖、華美をするがの富士のやま
 箱根山をばくらしと通り、はなの小田原星づき夜
 箱根八里は馬でも越すが、越すに越されぬ大井川
 いそげ早漕げ、桑名の船頭、やがて熱田の宮につく
 わたしや長良の船頭の娘、船も漕も漕ぐ櫂も曳く
 伊勢は津で持、津は伊勢で持、尾張名古屋は城で持

無季の部

無季の部

美濃に妻もち尾張に住めば、雨は降らねど寢戀し
 志賀のさゞ波立つともまよ、霞かくれの舟床し
 たとへ切ても便はさんせ、あれた志賀にも咲く櫻
 幾夜明石のうらこぐ舟も、うかれ焦れて磯へよる
 蟹の小舟の艀櫂を推して、すまや明石のわび住居
 天の橋立いくの、道の、遠いたび路をふみのつて
 心よし、吉野のさくら、あい嬌こぼして御所櫻
 磯は戀しや大洗さまの、松が見えますほのくと

無季の部

沖の暗いのに白帆が見える、あれは紀の國蜜柑船
 渡り比べて世の中見れば、阿波の鳴戸に波もなし
 阿波の鳴戸に身は沈むとも、君の事なら背くまい
 さつさ押せ、下の關迄も、押せば港が近くなる
 船頭可愛や穩戸の瀬戸で、一丈五尺の櫓がひはる
 安藝の宮島まはれば七里、うらは七うら七ゑびす
 丹波雪國つもらぬさきに、つれてお出やれ薄雪に
 丹波田どころ、良い米どころ、娘遣りたや婿欲しや

無季の部

見ましよ見せましよ浦戸を明て、月の名所は桂濱
 面白いぞや木曾路の道は、笠へ木の葉が舞かゝる
 木曾の御嶽さんは、夏でも寒い、裕遣たや足袋添て
 矢並つくるふ那須野の霰、消えてくだけて玉の露
 土佐はよい國南をうけて、薩摩あろしがそよくと
 西は追分、東は關所、せきしよ越ゆれば茶屋の町
 潮來出島の十二の橋を、ゆきつもどりつ思あん橋
 潮來出てから牛ぼりまでは、雨もふらぬに袖絞る

無季の部

お江戸出てから戸塚はとまり、駒を早めて藤澤へ
 みやこまさりの浅くさ上野、花のはる風音さへる
 こゝは何處ぞと船頭衆に問ば、こゝは梅若墨田川
 いく夜しをれて貴船の河も、そでの涙に玉ぞ散る
 思てかよへば千里が濱も、障子ひとへと思て來る
 來と言れて行れヨか佐渡へ、佐渡は四十五里波の上
 新發田八萬石荒地になるが新瀉通ひはやめられぬ
 新瀉女郎衆は錨か綱か、今朝も出船を二艘とめた

無季の部

關の地藏にふり袖させて、奈良の大佛むこにとろ
 關の三本松、一本きりや二本、あとは切れぬ女夫松
 信州信濃の新蕎麥よりも、私やお前のそばがよい
 坂はてるく、鈴鹿はくもる、あひの土山雨が降る
 難波入江の身は捨小舟、岸にはなれてたよりなや
 琉球へおじゃるから草鞋穿ておじゃれ、琉球は石原小石原
 難波潟短かき蘆の節の間なりと、どうして逢はずに過されう
 箱根山、くもらばくもれ晴れたとて、花のお江戸は見えやせん

人 名

忠義一途のお初は世にも、主人もつ身のかじみ山
 お七火に死におはつは刃、翌日は誰がうへ戀の果
 いざり勝五郎くるまに乘せて、ひくは初花箱根山
 妹脊山では可わいなあみは、男とられて殺されて
 賤の緒だまさくり言いふて、ふかく入鹿の奥御殿
 わしが國で見たいものは、昔や谷風いま伊達摸様、床しなつ
 かし宮城野しのぶ、うかれまいぞへ松島登、しよんがい

無季の部

無季の部

君は今ごろ駒下駄はいて、聲も高尾のそりぶし
 與作思へばてる日も曇る、せきの小萬がなみだ雨
 ゆふべツガ、く降つたる雨は、トラが涙が風強し
 野暮な屈原泪羅にしづむ、私ヤ笑くばに身を投る
 韓信が、股をくいるも時代と時節、ふまれた草にも花が咲
 金時が、熊をふまへてまさかり持つて、富士の裾野のかりくらや
 義経辨慶渡邊の綱、唐の大將あやませ、神功皇后武
 内の臣、軍人形よしあし、菖蒲刀やあやめ草

人

さらば面影はなれもやらで、人のつらさにます鏡
 限りある身にさりとは人の、遠き行方を思へとや
 人にもものいや油の雫、落ちてひろがる何處までも
 人の口には戸がたてられぬ、流れ川には堰ならぬ
 人の事かと立寄聞けば、きけば指名はわしがこと
 人が言ひますこなたの事を、梅や櫻のとりぐに
 人を頼んでかうぢやと言か、但しうち明話さうか

無季の部

無季の部

心

君は辛くも恨みはせまじ、心からなる身のうさを
 絶えてしなくばなかく人も、身をも恨みじ我心
 逢はでくもりし心の鏡、あふて露さんうたがひを
 消えぬ心の半は雲に、かよふあらしをよすがにて
 はやるかんだし、髪形よりすくな心がうつくしい
 金がかたきで身は人のもの、心ばかりが主のもの
 私の心は萱ぶき屋根よ、かはらないのと察しやんせ

思

行くも販るもしのぶの亂れ、限り知られぬ我思ひ
 まれに逢ふ夜は人目を忍び、語りつくさん我思ひ
 思ひ重ねてくるしや今は、逢はで命も絶えなまし
 さしも知らじな斯とは君に、包む思のもゆれども
 なませなま中慣ずば斯程、物は思はじさりとては
 物や思ふと問ふ人あらば、せめて語りや慰さまん
 忍ぶ心を色には出さじ、ものや思ふと問ふばかり

無季の部

無季の部

まだき我名の立ちたるとても、思ひ初しを一節に
 思ひあまりて見えし夢よ、さめて涙のほかぞなき
 あだな契りを結びて今は、我身ひとつの憂き思ひ
 思ひ餘りて折り焚く柴の、けむり淋しき夕まぐれ
 人目忍べば其名も言はで、思ふあたりのとどざく
 こなた思へば照る日が曇る、冴た月夜が闇となる
 こなた思へば野も脊も山も、簾も林も知らて行く
 思ひ出すとは忘るゝ故よ、思ひ出さぬよ忘れぬは

無季の部

こなた思へば千里が一里、逢はず戻ればまた千里
 思ひ念力岩でもとほす、なんのそなたの一重がさ
 ひとり寝る夜の其明くる間は、いかに久しき物思
 こなた思ふたらこれ程をせた、二重廻が三重廻る
 思ひまはせば浮世はかゞみ、笑ひ顔すりや笑ひ顔
 思ふまいぞと思ふも思ひ、なぞと思ふもまた思ひ
 主は今頃さめてか寝てか、思ひ出してか忘れてか
 人しれず、思ひ初しがもう兎やかうと、浮名立つてはなほ止めぬ

無季の部

殿(様)

思ふ殿御が野邊ござるなら、涼し風吹け雨降るな
 あれに見えるが殿御の館、煙立つのがなつかしい
 殿を持つなら村一ばんの、大鼓たしきか笛ふきか
 殿と寝るかや五千石とるか、何の五千石殿と寝る
 眞の間にも迷はぬ我を、あゝさて其様の迷はする
 様よくとこがれて來たに、様は啞かよ物言はぬ
 縷子の袴の襷積取るよりも、様の機嫌の取悪くさ

戀

雲の旗手の其方を戀で、住めば住む身ぞ味氣なき
 憂しや此の身は親はらからの、爲に沈みし戀の淵
 忍ぶ戀路もついで色に出て、ものや思ふと人が言ふ
 戀路やせきやるな浮世は車、命長けりや廻りあふ
 人も斯うかと身に引きくらべ、涙もろいも戀の情
 玉の言葉を錦に織つて、つゞりあげたる戀ごろも
 戀といふ字をぶんせきすれば、糸し糸しと言ふ心

無季の部

無季の部

程のありとは戀路ぢやないぞ、近き遠きは言ぬ事
 昔や馬道今くるまみち、かよひくるわの戀のみち
 憂しと見し世もけふ日になつて、見ば戀しい事計
 としも十五の満月むすめ、やがて覺える戀のやみ
 ほんに思へば昨日今日、月日立つのも上の空、人の譏りも世の
 義理も、思はぬ戀の三ツ瀬川、逢はぬ其の日は氣にかゝる、逢
 へば口舌の種となる、憎らしい程可愛うて、エ、妾が心は何
 んじややら

夢

夢になりとも情はよいが、人の辛さを聞くもいや
 逢で寝る夜は袖ひぢまざる、夢は枕のいとまなや
 夢になりとも逢せてたもれ、夢に浮名は立やせまい
 逢た夢見て笑ふてさめて、あたり見まはし涙くむ
 逢と見し、夢は空しく覺て又、辛き現の園の内、思て見て
 もふさいでも、眞に心の遣方もなや、どうせ逢れぬ浮世なら、
 深山の奥の其奥の、すつとの奥に住居して、人目思て物思たや

無季の部

火（悋氣）

心細くもともしび更けて、まづは命の消えもせず
 衛士の焚く火は夜こそ燃れ、胸に焚く火の絶やらぬ
 西のひさしに燈火さつて、きれぬゑにしのもの語
 胸で苦しき火は焚くけれど、烟たゝねば人知らぬ
 平家の一門皆蟹となる、わたしや悋氣で鬼となる
 淀の車は水ゆる廻る、わたしや悋氣で氣が廻る、眞にやる瀬が
 ないわいな、實々造る瀬がないわいな

詩 俗 的 詩

涙

花にむく露小ざさのあられ、こぼれやすきは我涙
 逢ふも別れもみないによる、涙貫けかたみにも
 人の満干のこゝろも知らで、底なげなる我なみだ
 なみだならでは哀れを問はじ、深き思ひの袖の色
 しのぶ袂のいろ見えそめて、心にも似ぬ我なみだ
 袖の湊の寄る瀬を知らば、うれしかるべき涙かは
 胸の焔は吐息となつて、曇りはなみだの雨となる

無季の部

別

今は身に知る愛別離苦の、憂を思へばなかくに
 別れぬる夜のつらさを問はじ、後の朝の文ばかり
 あはぬつらさを焦れしよりは、逢ふて別るゝ浮涙
 様よアレ見よアノ雲行を、様とわかれもアノ如く
 逢ふた嬉しさ別れの辛さ、あはぬ昔がましかいな
 逢ふて嬉しや別が辛い、逢ふて別がなげにやよい
 きみと別れて松原行けば、松の露やらなみだやら

命

問はじ問へかし此夕暮を、あすの命も知らぬまに
 最早命も絶えなば絶えよ、住めば恨めし同じ世に
 身をば何せんちかひし人の、命のみこそ惜まるれ

髪

千代の前髪おろさばおろせ、私もとめましヨ振袖を
 忍ぶもじずりそりや誰ゆゑに、亂れて冷たい洗髪
 心中しましヨか髪切ましヨか、髪は生物身は大事

無季の部

無季の部

寫 眞

口でけなして心でほめて、人目しのんで見る寫眞

寢 顔

燐寸の明りで、顔寝をながめ、吸付煙草のひとり笑
寢顔覗いてニツコリ笑ひ、主によく似て可愛らし

旅

幾重かさなる山川なりと、こゝろへだつなたび衣
唐衣きつゝなれにし妻をば捨て、馬鹿らしいぞへ旅の空

移 香

ゆふべくのその移香は、キミが袂のゆかりとも
のこる移香枕にそひて、いとどわすれぬ間のうち

文

文は數多に書くともまよ、思ひそめしは唯一人
文は遣りたし書く手は持ず、やるぞ白紙文と讀め
硯ひき寄せ寫眞をながめ、落つる涙でふみを書く
反古にすまいと誓ふた文も、知りつゝ破つて枕紙

無季の部

無季の部

絲

いとをとるならむらなくほそく、可愛男の夏羽織
 君は絲繰る車はまはる、わたし惱氣で氣がまはる
 お前と一生暮すなら、深山の奥のわび住居、縫針仕事絲車、
 細谷川の布さらし、柴刈る手業もいとやせぬ
 むらさきの、結び目堅き縁の絲、解けぬも色の深翠り、まつに來
 ぬ夜は筆の先、怨みかされし命毛も、硯の海へはまるほど、深い
 浅いは客と情夫、くろうするの男故

鳥

鳥も通はぬ深山のおくも、住めば都ぢやのよ殿よ
 思ひ直して又來ておくれ、鳥も枯木に二度とまる
 山が焼るが立ぬか雉子よ、之が立りヨか子を置いて
 雉子野に住む、雲雀はやまに、鶉粟穂につま思ひ
 鮎は瀬に住む鳥ヤ木の枝に、人は情愛の下に住む
 池の子鮎に心をくれて、たちやかねたりしら鷺よ
 三千世界のからすを殺し、主と朝寢がして見たい

無季の部

無季の部

峯みねの小こまつに雛ひな鶴つるつがひ、谷たにのながれに鶴かめあそぶ
 しんの話はなしもまだせぬうちに、憎にくや鴉からすがつげわたる
 鳥とりが飛とぶく三みつ四よつ五いつつ、旅たびはさびしき暮くれの空そら
 今いまは亂みだれてうき山やま鳥どりの、長ながさつらさのももはるし
 足あしびきの、山やまどりの尾おの長ながくし夜よを、どうして一人ひとりて寝ねつかれう
 逢あはぬ夜よは、宵よひの騒さわぎで紛まれて居ゐれど、更よけて遠とほ音ねの三さん味み線せんを、聞き
 くに淋さびしき一人ひとり寝ねの、夢ゆめにおどろく足あし音ねは、もしや夫それかと胸むね騒さわ
 ぎ、エ、マア辛しん氣きな按摩あんまさん、憎にくまれ口くちな明あけ鳥がらす

松

磯いその松まつが根ね波なみうちかけて、立たつなわりなき戀こゝろの淵ふち
 岩いに唐から松まつぬいろとすれば、磯いその小こ波なみがゆりおこす
 めてたくの若わか松まつさまよ、枝えだもさかえる葉はも茂しげる
 目め出で度たくが三みつ重かさなれば、庭にはに鶴つる龜かめ五ご葉はのまつ
 松まつといふ字じは開かい化くわの文も字じよ、當たう世せばやりの公きみと木き
 松まつの根ね元もとへくるみを植うえて、松まつ(待まちつ)よりくるみ(來く身み)は辛つらいの
 紺こんの前まへ垂たれまつ葉はを染そめて、松まつ(待まちつ)に紺こん(來くん)とはよく染そめた

無季の部

無季の部

竹

竹にふしある浮世はいやよ、人の檻がき結たがる
竹に雀はしなよくとまる、とめてとまらぬ戀の道
竹の切口たまりし水は、澄まず濁らず出ず入らず
笛に育てし雄竹に雌竹、早くふうふとならせたい

花

花のあけぼの夕べの秋も、くらべぐるしき我が心
誰が折るだる眺めるだろ、仇に散のか野邊の花

無季の部

咲いて萎れて又咲く花は、優曇華のはな木瓜の花
嶺の櫻に谷間の紅葉、おかほ見ながらまゝならぬ
山に咲く花あらしが毒よ、わしは君さま見るが毒
たとひ百日見ないかとても、梅は櫻になりはせぬ
花はいろく五色に咲ど、主に見かへる花はない
さくら三月、あやめは五月、咲いて年とるうめの花
花に逢初月夜に焦れ、雪にやまつ身の目もあはず
下へくと枯木をながす、ながす枯木に花が咲く

無季の部

立てば芍薬、すわれれば牡丹、あゆむ姿が百合のはな
芽を出しや切取り、花咲や挟む眞に邪見な花鉄子

草

戀の山吹、なさけのあやめ、秋のかれ草しをれぐさ
蘆のかり寝の一夜なりと、逢ふて話がして見たい
浮草の、けふはむかふの岸邊に咲いて、日々の心とあすか川
草も寝しづむ夜もすがら、枕一つに寝もやらず、起も直らすま
た片思ひ、逢ぬ先なら知らず済む、心ばかりがエ、踵の元

滑稽

風が笛吹きヤ木の葉が躍る、狸うかれて腹つゞみ
西の山見よ跛者がとほる、笠が見えたり隠れたり
男持つなら跛者を持ちやれ、跛者踊る様で面白い
男持つなら片目を持ちやれ、覗見る時手がいらぬ
まゝにならぬと御櫃を投て、其處邊はまゝだらけ
思切れとて五合榊投た、之が一生(一升)の別れます
夢で戸たたく現であける、そこで狐がコンとなく

無季の部

無季の部

鬼が餅搗きや閻魔が捏る、側て御地藏が嘗たがる
 内の姉さん粉を引や眠る、團子喰ふ時や眼が光る
 あの子よい子ぢや牡丹餅娘黄粉つけたら尙よかる
 坊さん頭へ飯粒つけて、章魚の丸酢司よく出来た
 寺の門口蜂が巢を懸て、坊主出りや螫す這入や螫
 千部萬部の經文よりも、わたしや一步の金がよい
 お粗末なれども妾の男、どうも人にはかしくい
 論語讀々廓に通ふ、女郎も格子(孔子)の内ぢやもの

雜

西へ西へと月日も星も、さぞや東はくらかろう
 さても寝られぬ曉憂しや、過ぎし今宵のしかも今
 よしや嘆かじ叶はぬとても、定なきこそ浮世なれ
 たつる錦木かひなく朽て、添て年経る身ぞつらき
 まよよ田舎がまだ住よかる、主と二人で暮すなら
 海士の焚くなる藻鹽の烟、人の立居のしほとなる
 掛てよいのは衣桁に小袖、掛てたもるな薄なさけ

無季の部

無季の部

來たら寄なよ、立聞止しな、寄は茶も煮る菓子も出す
 踊をどるなら品よくをどれ、品のよいのを嫁に取る
 かたい約束あてにはするな、岩は碎れて砂利になる
 唄へくと急ぎ立てられて、唄も出ませぬ汗が出る
 たつは蠟燭たぬは年期、おなじ流れの身だけれど
 惚ちや居れども言出しにくひ、何か先から言ばよい
 立田川邊に船とめて、まだうら若き娘氣の、何う言うてよかるや
 ら、辛氣枕の空寝入り

無季の部

思ふ心のいつはりなきは、虎と見る箭の石にたつ
 石に立つ箭のありとは聞けど、なぜに届かぬ我思
 逢て立名が立名の内か、逢はて立つこそ立名なれ
 斯と知らさで消行くならば、辛き報のありやせん
 紺の服紗に髪伽羅こめて、おとす振して君にやる
 染めて悔しや藍紫に、元の白地がましぢやもの
 初手はじやうだん、中頃義理で、今ぢや互の實と實
 嘘も實も賣る身のつとめ、そこで相手の上手下手

無季の部

いやで幸ひ好かれちや困る、外によいのがある私
 としは二八のまだ若水で、人のなさけも汲かねる
 昔思へばうらめしゆござる、なぜに昔は今ないぞ
 賤のをだまさ又繰り返し、どうぞ昔にしてほしい
 逢ねば逢ぬて苦勞もするが、逢へば逢たて又苦勞
 更けて逢ふ夜の氣苦勞は、人目をかれて格子先、互ひに見かほす
 顔と顔、眼に持つ涙袖ぬれて、エ、意地わるな火の用心はなす
 話も後や先

可愛がられて又憎まれて、可愛がられた甲斐もない
 泣いて悔んで帯買うて貰うて、質に置れて流された
 諦めましたよどう諦めた、諦められぬとあきらめた
 時は世につれ世は時につれ、今の若い衆は嗅をつれ
 四十五十は女のさかり、三十九ちやもの花ぢやもの
 お前百まで私や九十九迄、ともに白髪のはへるまで
 お前一人か連衆はないか、連衆あとから駕籠でくる
 山椒胡椒より辛い物は世帯、ならぬ世帯は尙からい

無季の部

無の季節

無理を言のが私の無理か、無理を言はせる主が無理
 いやなち方の親切よりも、好きなち方の無理がよい
 夫たがやす娘はかせぐ、つまは背戸へ出て米かしく
 羽織ぬぎ捨て筒袖巻いて、百姓するのもくこのため
 草鞋切れても粗末にするな、藁はち米の親ぢやもの
 逢ひたさに、用無き門を幾度か、通れど出て来ぬ性根なら、矢張
 女房が怖いのか、然りとはお前は二心、エ、妾は氣が揉る、マア
 何うせうぞいな

裸體ちや行れぬ着て行しやんせ、背戸の木小屋に菰がある
 飲めよ騒げよ今宵の御酒よ、あすは出船の風を待つ
 飲みやれ歌やれささの世は闇よ、今はなかばの花盛
 飲みやれ大黒歌やれ恵比壽、ことに酌は福のかみ
 腹が立つ時や茶腕で酒を、飲んで暫く寝りやなほる
 お婆何處へ行く三升樽提げて、嫁の在所へ孫抱きに
 馬がよければ馬方までも、馬がいさめばいそくと
 馬方船頭は乞食におとる、乞食や夜る寝て書かせぐ

無の季節

無季の部

桶屋さんより木挽さんが悪い、中のよい木を引分る
木挽さんかよ懐かしゆござる、妾の殿御も木挽さん
今夜白ひき遊にござれ、白が重いかといふてござれ

新詩的俗謠(完)

附 録 俗 謠 研 究 の 葉

意 想 外 史 述

俗 謠 の 起 原

七七七五の詩形を以て成立つて居る二十六字詩、之を今日では殆んど一般に都々一だの又は情歌だのと呼び倣して居るのであるが夫れでは何だか語弊がある様に思はれ、矢張俗謠若くは俚謠といつた方がよろしい様である

サテ此の詩形は何時頃出来たものであらうか、何れの時代に其の萌芽を現はしたのであらうか、即ち俗謠の起原如何といふ問題、

俗謠の起原

俗謠の起原

之に對して明確なる答解を與へることは頗る困難な業で、諸書を參照して見ると實に異説紛々徒らに疑惑を増すのみで容易に解案を得ることが出来ぬ。衆の略一致する所は求め得ても、猶ほ種々の疑問が續出して来る。穿鑿を始めると殆んど限りがない。て自分には次の様に言つて置いたら何うかと思ふ

俗謠二十六字詩の眞の起原は今日之を明かにし難いけれども、近古小唄の祖として知られて居る彼の自庵と號した堺の隆達和尚が自作の歌に一種の曲節を附し、隆達節といふのを創めた。其の隆達節の中に、往々二十六字の詩形が用ゐてあるのを以て見れば、縦し其の源流を此に求め得ないまでも、最も遠き支流として之を許すことが出来よう。兎に角此の詩形の存在を明か

にし得るのは、天正文祿(今を距る事二百餘年前)の頃であること

俗 謠 の 變 遷

既に上にも述べた如く、俗謠の眞の起原は之を明かにし難いとすれば、其の變遷を説くに當りても、之が起點を何れに置いてよろしいかといふ疑問がある。が之も己むを得ず隆達節から始める事にしてしよう。隆達和尚は堺の日蓮宗顯本寺の僧侶であつたのが、何うした譯か、詳しい傳記がないから分らぬが何か面白い小説的な譯があつたものと見え、遂に還俗して藥種屋高三氏の家に入り賈人となつた。自庵と號して歌は自作、手跡は立派、聲も好いと來て居る上に、拍子もなか／＼氣の利いたもので、大に諸人の持て囃す所となり一流の祖として仰がるゝに至つたと聲曲類纂(弘化四年板)に記

俗謠の變遷

されてある。隆達が生死の年月は固より不明であるが、天正、文祿、慶長年間の人であることは、隆達自筆の小唄本の巻跋に文祿二年八月日自庵隆と記してあるのを以ても知られる。隆達節の中に二十六字の詩形が用ゐてあるのは、松の葉(元録十)に隆達節として、

◎夢(ゆめ)になりとも情(なさけ)はよいが、人のつらさを聞(き)くもいや

といふのが載せてあるので相像がつく。尙ほ同書には本手組、端手組の唄として次の様なのが載せてある

◎吹(ふ)けよ松風(まつかぜ)あがれよすだれ、いまの小唄(こ唄)の主見(ぬしみ)たや

◎眞(まこと)の聞(き)にもまよはぬわれを、あゝさて其様(そのさま)のまよはせる

本手組、端(は)又(また)は手組といふのは虎澤檢校や澤住(あ)又(また)は檢校の輩が其の節譜を作つたものとして知られ、其の時代も殆んど隆達と同時代であつて見れば之に就いても疑はしい點が數々ある。又鹿兒島節として、

◎志賀(しが)のさい浪立(なみだ)つともまゝよ、霞(かすみ)がくれの舟(ふね)ゆかし

といふのがあり薩摩節としては、

◎お江戸(えど)出てから戸塚(とつか)はとまり、駒(こま)をはやめて藤澤(ふじさわ)へ

◎親(おや)は他國(たこく)に子は島原(しまはら)に、櫻花(さくらばな)かや散(ち)りくくに

といふ様なのが載せてある。

其他、市喜山景雄氏の我自刊我本には諸國盆踊唱歌として、

俗話の變遷

◎ 標よあれ見よあの雲行を、さまと別れもあの如く

◎ 鳥も通はぬ深山の奥も住めば都ぢやのよ殿よ

◎ 月は東にすわるは西にいとし殿御はまん中に

◎ 舟がつくく二百二十七そう様がござるがあの中に

の類が載せてあり、何れも寛永(今を距ること二)以前の唱歌とせられて居る。して見ると此等の唱歌は誰が作つたもので、如何なる所に其の系統を引いて居るのであるか、疑問徒らに起り來るのみで、之を解決し得る材料が淺學不才なる自分には容易に見つからぬのである。

次に隴氣ながらも其の歴史的變遷を辿り得るのは、慶長の頃、江

戸に雲井弄(又は)齋といふ坊さんがあつて、性來小唄を好む所から隆達節を愛翫してなか／＼巧みなものであつたのが、後には一派をなして弄齋節といふのを案出し、大に世に持て囃されたといふ事である。して其の弄齋節の唱歌として傳つて居るのは、

◎ よしや今宵は曇らば曇れ、とても涙で見ろ月を

◎ 住めば淨世に思ひの増すに、月と入らばや山の端に

◎ なげきなる世も月日を送る、さても命はあるものか

といふ様なので、之も松の葉に載せてある。

其の次には、貞享元祿の頃京都から起つて廣く三都に行はれた投節といふのがある。之は弄齋節が變じたものとされて居る。京都

俗話の變遷

俗 談 の 變 遷

島原の投節といへば江戸吉原の繼節、大坂新町の雜節と共に當時音曲の三名物と言はれた程で、花柳界に於ける勢力は實に素晴らしきものであつたらしい。今其の中の二三を挙げると、

◎更けて砧の音より聞けば、月に落ちくる我涙

◎こゝろくくの世の中なれや、花のうてなの露のいる

◎月は人目の關路もなしや、西に流るゝ夜半の空

◎泣いて寝顔のなかばは雲に、見えてこぼるゝ袖の月

といふ様な調子で、弄齋節などと共に和歌の如き優麗典雅なる趣致に富んで居る

投節の次には潮來節といふのが、常州行方郡の潮來村から勃興し

來つて、江戸の俗曲界に大勢力を占むるに至つた、之は文化以前即ち今より凡そ百年程昔に流行したものである。俗談も潮來節に至つて餘程調子が亂れ、ともすれば淫靡の趣きを表はす様になつた

◎月にむら雲そよ吸く風に、袖に櫻がちらく

◎ちらりくと降る雪さへも、積りくつてふかくなる

◎しんの話もまだせぬうちに、にくや鴉のつげわたる

◎逢ふた夢見て笑うてさめて、あたり見まはし涙ぐむ

右に挙げたのは、其の中の最も優秀なるもの且つ厭味のないものであるが、夫れでも彼れ是れ比較して見ると稍卑猥の鋒芒があらはれて居る。

俗 談 の 變 遷

俗語の分類

此の潮來節が衰へて其の次に一大流行を來たしたのが今の都々一
て、之は天保年間常州水戸の落語家、初代都々一坊扇歌と號する
人が、席亭などで盛んに唸り出したのに創まつて居る。其の當時
から追々と亂調子に成つて、逆も士君子の耳には入れられない様
なものに成つて仕舞つた。俗語の變遷は實に斯の如くして、世を
追ひ時を重ぬるに従つて、次第々々に面白からぬものとなつたの
は眞に浩歎すべきではあるまいか

俗 語 の 分 類

俗語を分類するに就いては、從來種々の分類法が試みられた。形
式の上からしたのもあれば、内容の上からしたのもある。何れに

俗語の分類

しても其の成功は左程十分ではないらしい
岸上屋氣樓主人は正體、尻取、天地、折句、贈答、典故、文句入
翻譯、名所、地口、滑稽、字餘の十二に分類し、石橋思案外史
は先づ正體、變體、の二つに大別し、更に之を小分して、正體を
本格(七七七五の純二十六字式)と偏格とに、偏格を五字冠(五七七七五の三
十一字式)と字餘とに分ち
變體を文句入と折句と尻取と天地と滑稽とに五小分し、其の内て
尻取を伊呂波順と同逆順とに、天地を一首に就て天地が同音なる
ものと、何首が纏めて天地が一語或は一文章をなすものとに、滑
滑を純滑稽と地口其他のものとのに、各々小分して居られる。實
に精細を極めた分類である。終りの滑稽丈が内容上の分類法に依

俗謡の分類

つたもので、其他は皆形式上の分類である。其他普通に用ゐられて居る分類には春夏秋冬の四季及び雑の五部に大別したもので、又は伊呂波順に小分したものと等があり。之には一首の頭字に依つたものと主題の頭字に依つたものがあるが、何れにしても伊呂波分けにするのは無意味なことであらう様に思はれる。

編者が本書に試みたのは、俳句の分類法に倣うて春夏秋冬及び無季の五部に大別し、更に之を一首々々の主題に依つて小分して見たのであるが、其の成功は自ら恐入る程の不結果に終つたのである。併し今後俗謡に大なる趣味を持つて居る人が内容上に將た形式上に十分なる注意を拂うて改良進歩を企てたならば今一段の見

るべきものが出来るに相違ない。編者の希望は偏へに將來を楽しまんとするにある。

俗 謡 の 作 法

先づ最初に講究して置かねばならぬ問題は如何なる形式を擇ぶべきかといふ事で、二十六字式か三十一字式か夫れとも字餘か文句入か折句か尻取か天地か滑稽か、何れを擇べばよいかといふ事から決めてかゝらねばならぬ。之に就ては十人十色人様々の意見もあらうなれど、自分は普通二十六字式を用ゆる事にして置いて、其他のものは臨機應變の處置位などにして、殊更之を作つて見ようなど、大膽な企てをするにも及ぶまいと思ふ。其の理由は今更喋

俗謡の作法

俗謠の作法

喋を要するまでもなく、古來幾多の人士が既に企て、見て其の多くが不成功に了つて居るのに鑑みればわかる。特に三十一字式の如きは其の位置を短歌に譲つてもよいではないか。次に内容と形式と何れを主とすべきかといふ事も一の重大なる問題で、之に就ては随分極端な思い切つた意見を懐いて居る人もあるやうであるが、自分は多少の傾向は已むを得ぬとして努めて一方を重んずる様にするのは餘り面白くない事であらうと思ふ。内容美と形式美と共に完全でなくては立派な詩として許すことは出来まい。美しき感情を表象すると共に之を妙なる五音律呂の上にあらはし示さうといふのが俗謠の俗謠たる特長であるとするれば尙更のこと兩方面共に重きを置かなくてはならぬ。

内容美は俗謠の精神で、形式美は其の容姿である。で、姿形に艶なる所を見せ、心想に情を籠めるといふことが俗謠を作る者の最も注意を拂ふべき點で、其の用語は最も通俗なるものを選び、眼で見るともなく聞いた耳で直ぐと合點の行くやうなのでなくてはならぬ。俗謠を作るに當つて心得置くべき要件は凡そ以上に述べた位なもので、物々しく述べ立てる程の八ヶ間敷い規則といふ様なものがなく、至極お手輕に造作なく作つて見ることの出来るのが俗謠作法の特長ともいふべきである。併し全然規則のないものと思ひ、無暗矢鱈に作り得る様に考へるのは甚だよろしくない。早い話が思想交換の要具としての言語、日常普通の談話に於ても既に一定

俗謠の作法

俗謡の批評

の法則があり、其の法則を外にしては自己の思想感情を表はすことが出来ぬではないか。況してや韻あり律あるべき詩としての俗謡に於てをやだ。俗謡として特別に數へ立てる程の物々しい法則こそないにしても、和歌や俳句にいふ普通の法則位は心得て居らねばなるまい。今茲に其の概要までも述べて見たいのであるが、豫定の紙數に限りがあるから残念ながら省略する。尙ほ作例をも示す積りであつたが之も同様、他日の機會を待つことにしよう

俗 謡 の 批 評

凡そ批評には破壊的方面と構成的方面とがある。即ち短所を指摘して長所を發揮し、除くべきを除いて補ふべきを補ふのが批評の

批評たる本旨である。て今も此の見地に立つて俗謡の批評を試みて見ようと思ふ

物皆長あり短あるもので、俗謡も亦之を免れぬのであるが、短俄に補ふ可らず長俄に揚ぐ可らず、這般の手加減は餘程注意しなくてはならぬ。鼻脛短しと雖之を續がば則ち憂へん、鶴脛長しと雖之を斷たば則ち悲まん位のこととは心得て居る必要がある

俗謡の長所は一言にして之を掩へば、内容形式共に何處までも通俗的で眼に親まんよりも耳に狎れ易く、寧ろ所謂文學に遠くして却つて音樂に近いといふにあるであらう。て、其の短所はと云へば、通俗が卑俗に流れて遂には姪靡となり、耳に狎れて音樂に近づくの結果、其の調子が次第に亂れて鼓膜に與へる刺戟の強度を漸

俗謡の批評

次に増さしむる様な傾向が見えるといふにあるであらう。俗謠を呼ぶに情歌の稱を以てし、俗謠は人情美のみを謠ふべきものゝ様に考へて居る人も随分あるやうであるが之は一を見て未だ二を知らざるもので、古來俗謠に依て自然美の謠はれて居るのは其の例に乏しくない。且つ俗謠は自然の野趣を謠ふに於て他のものゝ企て得ない程の長所を有して居る。夫れのみでなく自然美と人情美とを兼ね有する點に於ても殆んど和歌の優美と俳句の簡雅とを調和し得たかと思はしむる程の特長を備へて居る。既に豫定の紙數に達して居るが爲め、今茲に一々例證を擧げて細評を試み得ないのは如何にも遺憾なる極みであるが、俗謠に興味を有する人は本書に選び載せた所のものを仔細に點檢して直ちに了解せら

るゝてあらう

俗謠は俗なりと雖之を卑俗に流れしめ、其の謠ふに適せりと雖之が文學的價値を失はしめず、内容に苦心し形式に工夫し用語に注意したならば、之を平民文學として發達せしめ、民俗詩として進歩せしむること敢て難くはあるまいと思ふ。故に編者の切に望む所は、本書の讀者中に眞面目なる俗謠の研究者を得んとするにあるのである

俗謠の批評

次に増さしむる様な傾向が見えるといふにあるであらう
俗謠を呼ぶに情歌の稱を以てし、俗謠は人情美のみを謠ふべきものゝ様に考へて居る人も随分あるやうであるが之は一を見て未だ二を知らざるもので、古來俗謠に依て自然美の謠はれて居るのは其の例に乏しくない。且つ俗謠は自然の野趣を謠ふに於て他のものゝ企て得ない程の長所を有して居る。夫れのみでなく自然美と人情美とを兼ね有する點に於ても殆んど和歌の優美と俳句の簡雅とを調和し得たかと思はしむる程の特長を備へて居る。既に豫定の紙數に達して居るが爲め、今茲に一々例證を擧げて細評を試み得ないのは如何にも遺憾なる極みであるが、俗謠に興味を有する人は本書に選び載せた所のものを仔細に點檢して直ちに了解せら

るゝてあらう

俗謠は俗なりと雖之を卑俗に流れしめず、其の謠ふに適せりと雖之が文學的價值を失はしめず、内容に苦心し形式に工夫し用語に注意したならば、之を平民文學として發達せしめ、民俗詩として進歩せしむること敢て難くはあるまいと思ふ。故に編者の切に望む所は、本書の讀者中に眞面目なる俗謠の研究者を得んとするにあるのである

附 錄 俗 謠 研 究 の 葉 (完)

明治三十八年九月十五日發行

【定價金二十錢】

不許複製

發行所

(東京市本郷區
彌生町三番地)
(東京市神田區表
神保町十番地)

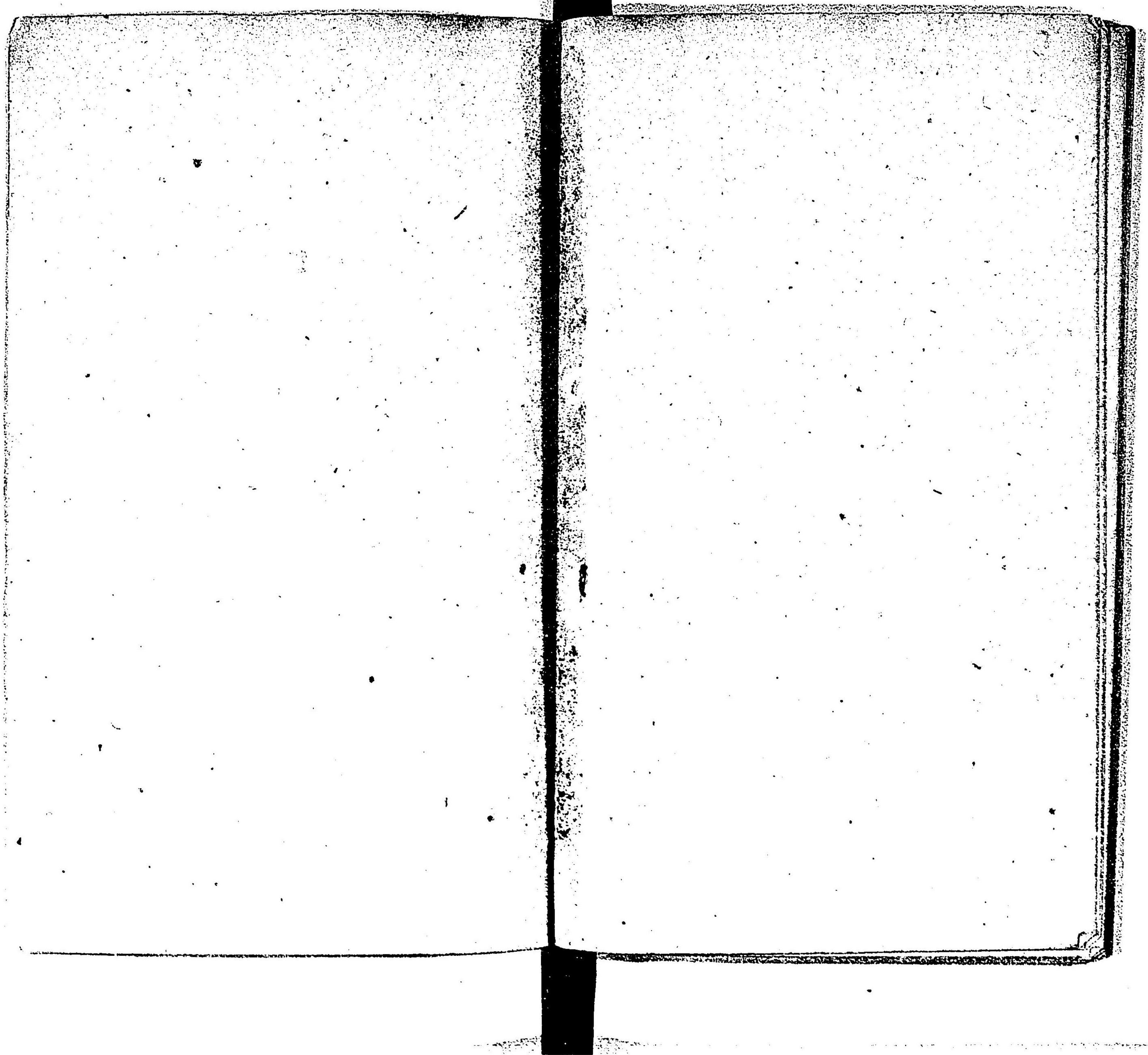
言文社
東西社

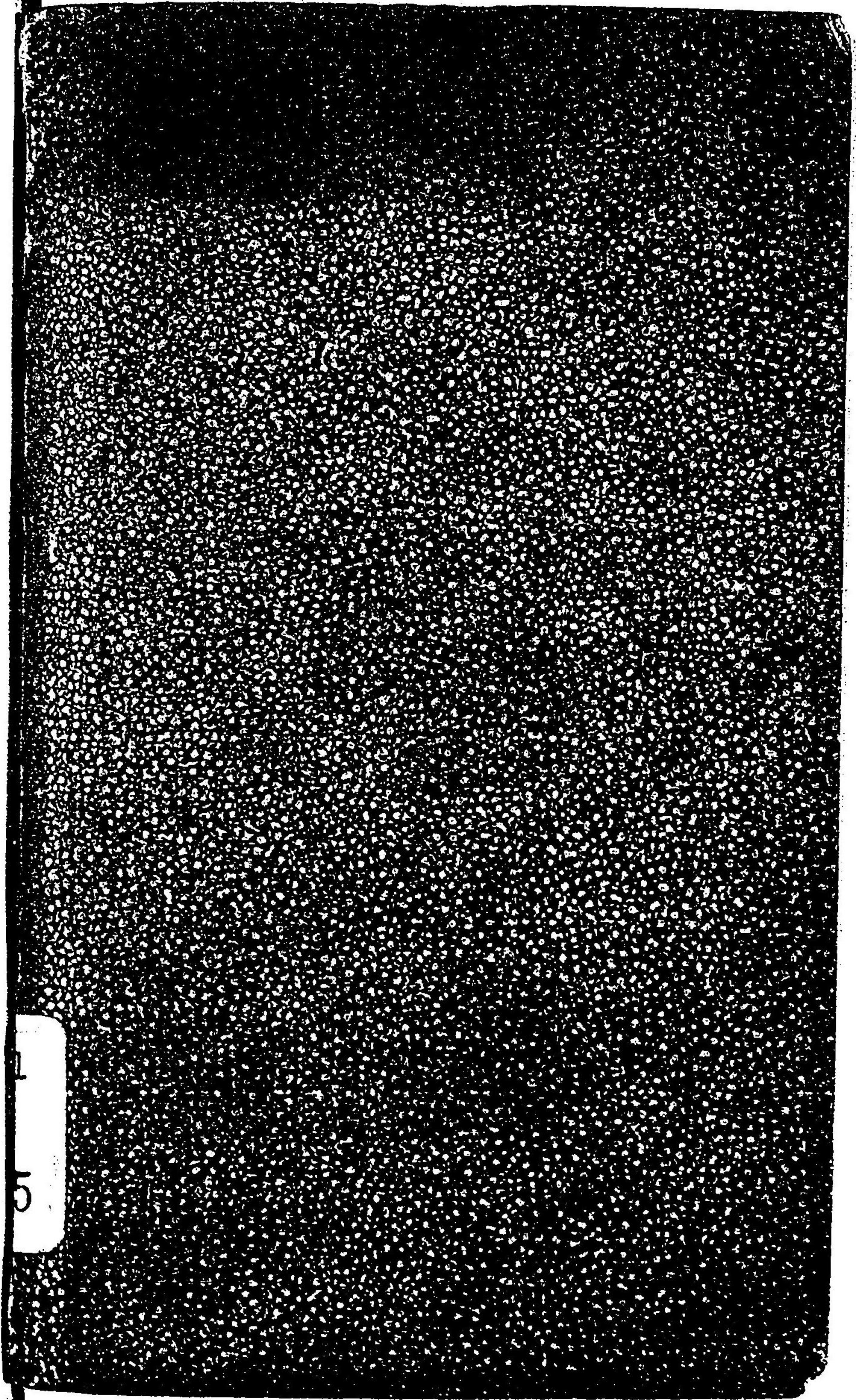
編輯者 意想外史

發行者 內田正義

印刷者 遠藤銓吉

印刷所 六舍
東京市京橋區岡崎町二丁目廿五番地





5